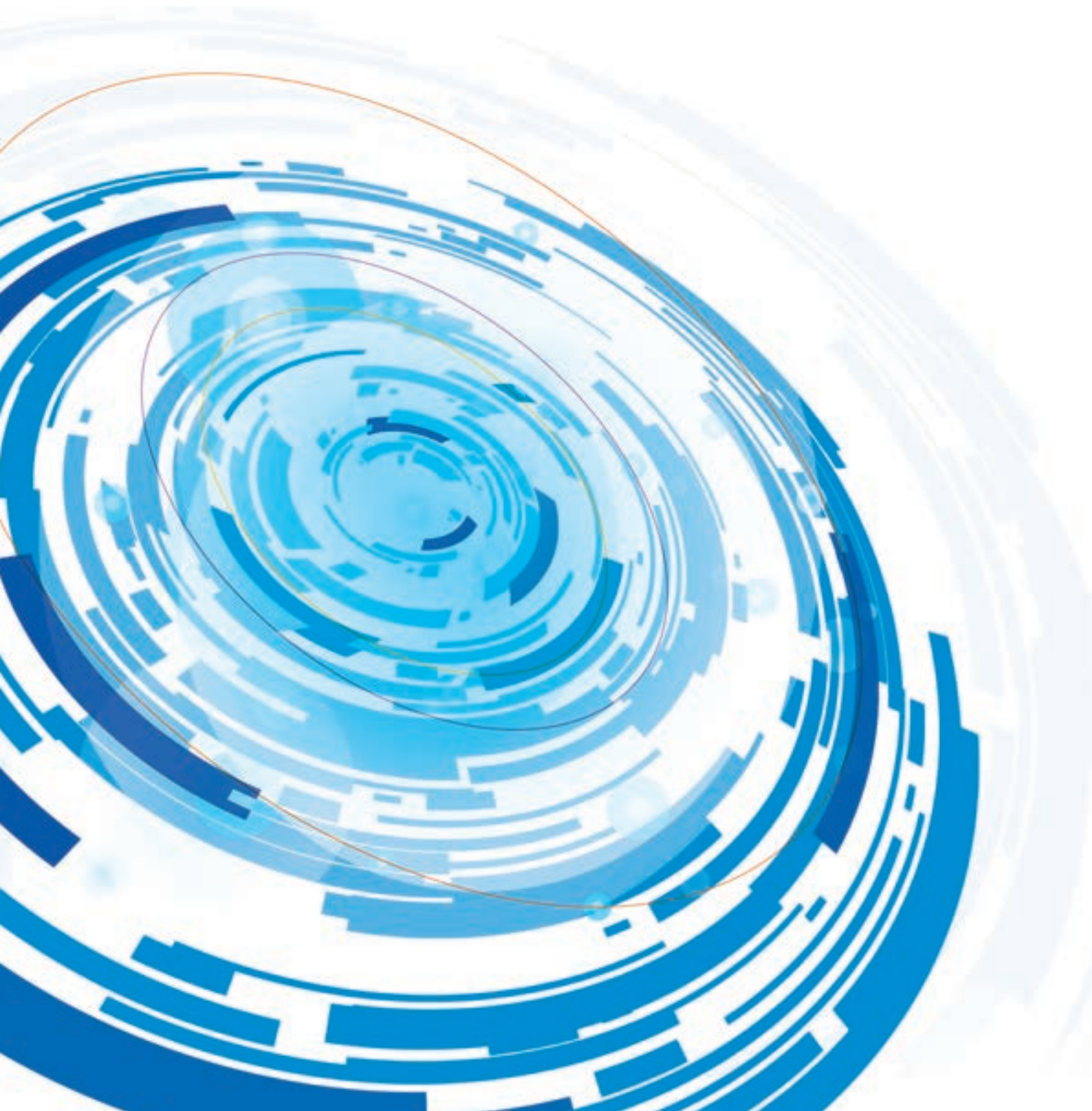


ULVAC

ULVAC REPORT 2014

CSR & Annual Report



アルバックグループについて

すべてのステークホルダーに対して責任を果たすこと。
そして最先端の技術を研究開発し、
社会に貢献することがアルバックグループのCSRです。

▶ 経営基本理念

アルバックグループは、互いに協力・連携し、
真空技術及びその周辺技術を総合利用することにより、
産業と科学の発展に貢献することを目指す。

▶ 経営方針

- 顧客満足 of 増進
- 自由闊達な組織
- 生産技術の革新
- 企業価値の向上
- 独創的な商品開発



編集方針

「アニュアルレポート」と「CSRレポート」を統合し、「アルバックレポート」として2年前に一新しました。アルバックグループの業績に加えて、CSR活動の取り組みをステークホルダーの皆様にご理解いただくとともに、コミュニケーションを促進していく重要なツールと位置づけ発行しています。

- 発行：
2014年9月
(前回発行2013年9月、次回発行予定2015年9月)
- 参考にしたガイドライン：
ISO26000；2010 (Guidance on social responsibility) 第1版

対象範囲と期間

- 【対象範囲】
▶アルバックグループ
アルバックグループを対象としていますが、一部対象範囲が異なる箇所は、その旨を明記しています。
- 【対象期間】
▶2014年6月期（2013年7月1日～2014年6月30日）
一部この期間外の情報が含まれている箇所は、その旨を明記しています。

〈免責事項〉

本レポートに記載されている表やグラフの数値は、四捨五入して表記しているため、合計値と異なる場合があります。また、対象範囲の拡大や算出方法の見直しに伴い、一部過年度データを修正している箇所があります。



▶ INDEX

アルバックグループについて・編集方針	1
アルバックグループの概要	3
トップインタビュー	5
持続的な成長に向けて	9
CSRの活動実績と目標一覧	11
ココニモ、アル。アルバックの真空テクノロジー	13

▶Technology アルバックグループの技術

アルバックブランドの向上をめざして	15
アルバックグループのグローバル知的財産	17
構造改革と一貫した調達活動	18
アルバックグループのグローバル事業展開	20

▶Environment アルバックグループの環境

グローバル環境管理の推進と環境負荷の最小化を目指して	22
環境配慮製品	23
座談会「田んぼプロジェクト」5年目を迎えて	24
アルバックグループの環境パフォーマンス	27

▶Organization アルバックグループの組織

努力と成果に報いる人事制度により個人と組織の活性化へ	28
CSR社員意識調査結果を受けて	30
ものづくりを支える健康づくり	31
労働安全衛生	32
地域社会(グローバルな企業市民活動)	34

▶Management アルバックグループのCSRマネジメント

コーポレート・ガバナンス/コンプライアンス	35
リスクマネジメント	36
役員一覧	37

▶Finance 財務ハイライト

財務ハイライト	39
営業の概況	41
株式の状況	44

コミュニケーションツールのご紹介

アルバックレポート2014
[ダイジェスト]



冊子

すべてのステークホルダーの皆様にお伝えしたい重要な取り組みをまとめ、冊子としてご報告いたします。

アルバックレポート2014
[フルレポート] 日・英



PDF

アルバックの取り組みをより深くご理解いただくために、PDFデータにて2013年度の取り組みを網羅的に掲載しています。

アルバックレポート2014
[第110期 事業報告書]



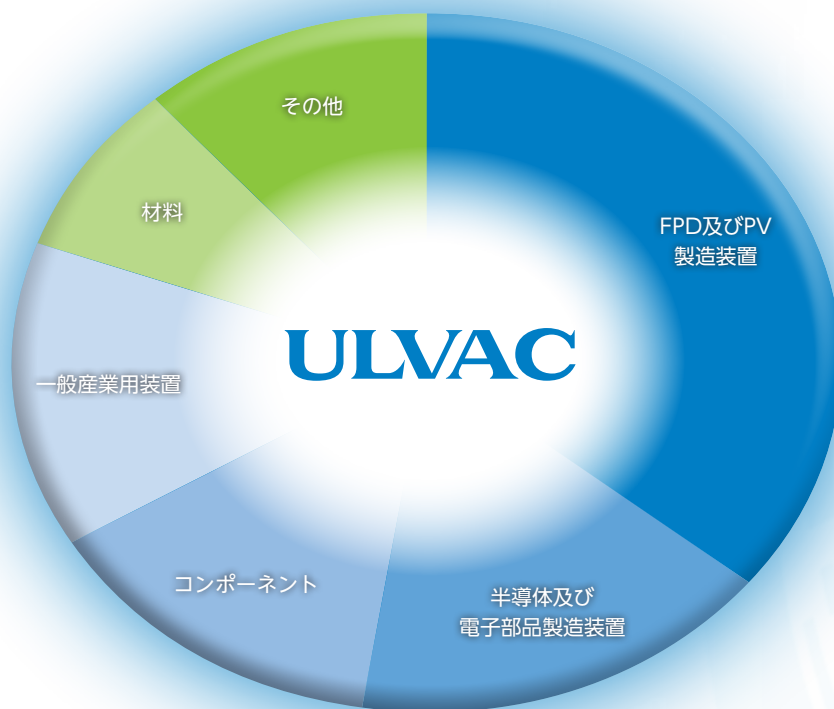
冊子
PDF

主に株主の皆様を対象に、2013年度の事業概況をわかりやすくご報告いたします。

アルバックグループの概要

■商号 株式会社アルバック ULVAC, Inc.
■商標 ULVAC
■本社 神奈川県茅ヶ崎市萩園2500番地
■設立 1952年8月23日
■資本金 208億7,304万2,500円

■社員数 1,105人(連結5,971人)(2014年6月30日現在)
■事業内容 ディスプレイ・太陽電池・半導体・電子・電気・金属・機械・自動車・化学・食品・医薬品業界及び大学・研究所向け真空装置、周辺機器、真空コンポーネント、材料の開発・製造・販売・カスタマーズサポート及び諸機械の輸出入。また、真空技術全般に関する研究指導・技術顧問。



アルバックグループの事業内容

▶ 真空機器事業



▶ FPD及びPV製造装置

- 液晶ディスプレイ製造装置
- 有機EL製造装置
- インクジェットプリンティング装置
- 真空巻取(蒸着・スパッタリング)装置
- 結晶系太陽電池製造装置
- 化合物系太陽電池製造装置



▶ 半導体及び電子部品製造装置

- 半導体(メモリー、ロジック、パワー半導体など)製造装置
- LED製造装置
- 電子部品製造装置



▶ コンポーネント

- 真空ポンプ ● 真空計
- ヘリウムリークディテクタ
- プロセスガスモニタ
- 分光エリプソメータ
- EB・RF・DC電源
- 真空バルブ
- 成膜コントローラ
- 真空ロボット



▶ 一般産業用装置

- 真空熱処理炉
- 真空溶解炉
- 真空ろう付炉
- 希土類永久磁石生産装置
- 凍結真空乾燥装置
- 高真空蒸留装置
- 漏れ試験装置

▶ 真空応用事業



▶ 材料

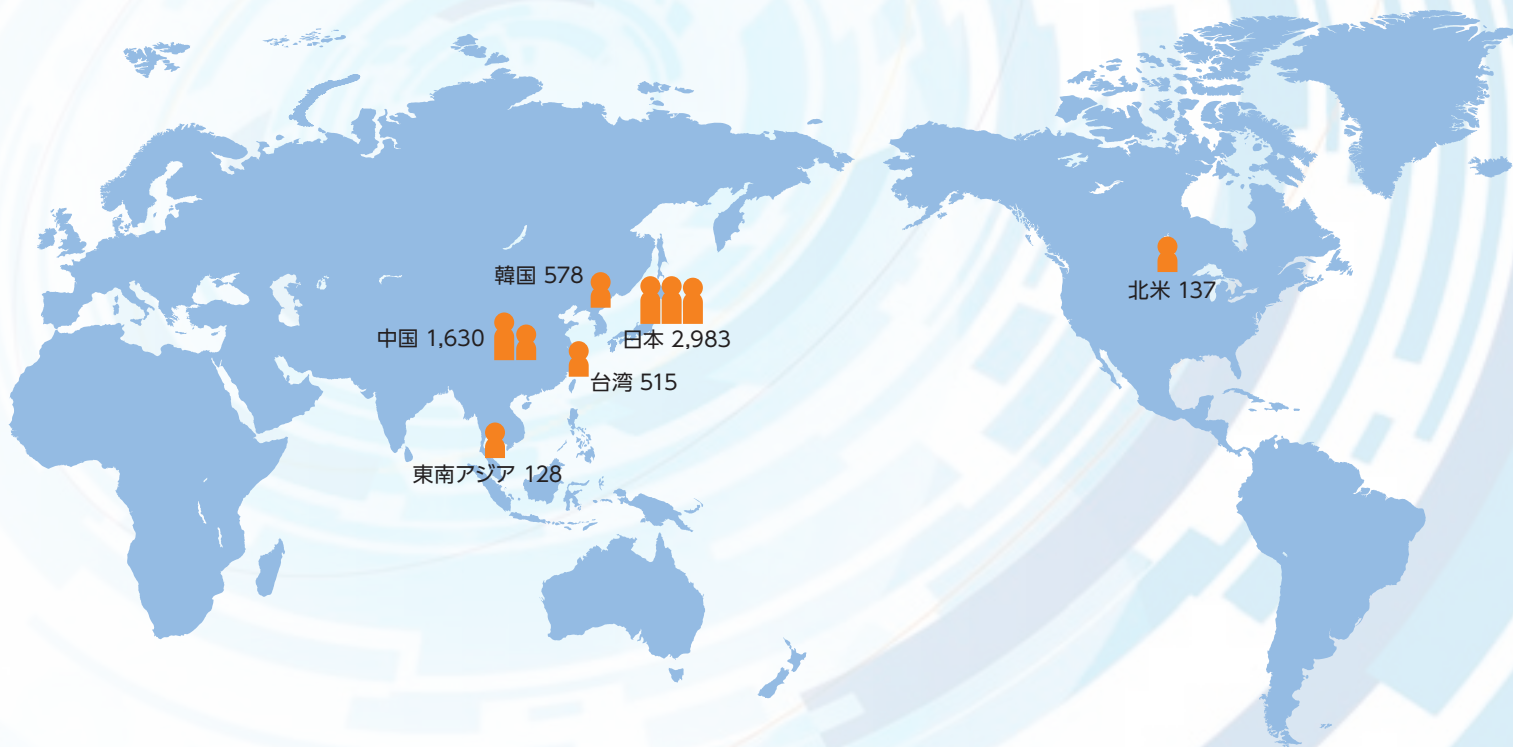
- スパッタリングターゲット材料
- 高融点活性金属材料及び部品製作
- ナノメタルインク



▶ その他

- 表面分析装置 ● 制御装置
- 熱分析装置
- マスクブランクス他

連結地域別社員数(人) (2014年6月末現在)



アルバックグループ

株式会社アルバック

国内グループ会社

- アルバック理工(株)
- アルバックテクノ(株)
- アルバック九州(株)
- アルバック東北(株)
- アルバック機工(株)
- アルバック販売(株)
- アルバック・クライオ(株)
- アルバック・ファイ(株)
- タイゴールド(株)
- アルバック成膜(株)
- 日真制御(株)
- (株) イニシウム
- アルバックヒューマンリレーションズ(株)
- 真空セラミックス(株)
- (株) ファインサーフェス技術
- 日本リライアンス(株)
- (株) 昭和真空

海外グループ会社

- 北米
 - ULVAC Technologies, Inc.
 - Physical Electronics USA, Inc.
- 欧州
 - ULVAC GmbH
- 中国
 - 愛発科(中国)投資有限公司
 - 寧波愛発科真空技術有限公司
 - 愛発科真空技術(蘇州)有限公司
 - 愛発科東方真空(成都)有限公司
 - 愛発科自動化科技(上海)有限公司
 - 愛発科天馬電機(靖江)有限公司
 - 愛発科中北真空(沈陽)有限公司
 - 愛発科商貿(上海)有限公司
 - 愛発科電子材料(蘇州)有限公司
 - 愛発科豪威光電薄膜科技(深圳)有限公司
 - ULVAC CRYOGENICS (NINGBO) INCORPORATED
 - 寧波愛発科精密铸件有限公司
 - 愛発科(蘇州)技術研究開發有限公司
 - 洛陽鑫友鎂業有限公司
 - 香港真空有限公司
 - 愛発科真空設備(上海)有限公司

- 台湾
 - ULVAC TAIWAN INC.
 - ULTRA CLEAN PRECISION TECHNOLOGIES CORP.
 - ULCOAT TAIWAN, Inc.
 - ULVAC AUTOMATION TAIWAN Inc.
 - ULVAC SOFTWARE CREATIVE TECHNOLOGY, CO., LTD.
 - ULVAC Materials Taiwan, Inc.
- 韓国
 - ULVAC KOREA, Ltd.
 - Ulvac Korea Precision, Ltd.
 - Pure Surface Technology, Ltd.
 - ULVAC CRYOGENICS KOREA INCORPORATED
 - ULVAC Materials Korea, Ltd.
 - UF TECH, Ltd.
- 東南アジア
 - ULVAC SINGAPORE PTE LTD
 - ULVAC MALAYSIA SDN. BHD.
 - ULVAC (THAILAND) LTD.

事業構造改革から成長フェーズに転換し、新たなステージへ 将来の成長に向けた戦略的研究開発投資の促進

Q1 当期(2014年6月期)の営業状況と成果についてお聞かせください。



代表取締役執行役員社長

小日向 久治

売上高、利益ともに前期比増加

売上高に関しては、1,739億円と前期を100億円強上回ることができました。

売上高の内容を見ますと、当期はFPD及びPV製造装置、半導体及び電子部品製造装置、コンポーネント、一般産業用装置、材料のいずれもが前期に比べて増加し、特に半導体及び電子部品製造装置が大きく伸びました。

また、利益面では、営業利益・経常利益は、売上高の増加効果に加え、半導体及び電子部品製造装置ならびに分析機器・成膜を含む真空応用事業などにおいて、利益率の高い案件のタイミングが重なったこともあり前期に比べ大幅に増加し、各々120億円、134億円となりました。また、当期純利益につきましては、子会社株式・不動産の売却を中心に特別利益25億円を計上したこともあり過去最高の115億円を達成いたしました。

「営業本部」の拡充が奏功、中国・東南アジアで成果

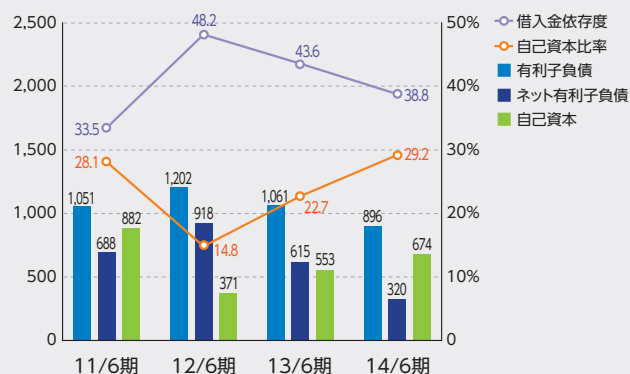
営業面では、前期に実施した販売体制の確立に続き、当期はグローバル展開を強化すべく、アルバックの「営業本部」を拡充いたしました。

これは営業本部が、アルバックと海外子会社の営業活動の連携を促進し、一元的に統括することで、グローバルでの受注獲得に向けたアプローチをより効果的に進めていくことが目的です。当期は、中国・東南アジアの営業展開において成果を上げ、特に中国

1. 業績の推移・予想 (単位：億円)

	13/6期	14/6期		15/6期予想 通期
		実績	前期比	
受注高	1,668	1,698	30 (+2%)	1,700
受注残高	725	672		622
売上高	1,634	1,739	105 (+6%)	1,750
売上総利益 率	370 22.6%	426 24.5%		
販管費	308	307		
営業利益 率	61 3.7%	120 6.9%	59 (+96%)	90 5.1%
経常利益 率	63 3.8%	134 7.7%	71 (+114%)	85 4.9%
特別利益	3	25		
特別損失	71	7		
税金費用他	32	36		
当期純利益	-38	115	153	65

2. 自己資本・有利子負債の推移 (単位：億円)



ではFPD製造装置の大型案件獲得につながりました。今後とも顧客企業の生産活動が国境を越えて広がっていく動きに対応し、グループ内の営業活動の協調・最適化を図り、シナジーを発揮していきます。

資産のスリム化により、財務健全化も進展

財務体質の健全化にも大きな進展が見られました。

棚卸資産の削減や売掛債権の圧縮、固定資産の処分等を推進し、資産のスリム化を進めました。これにより、ネット有利子負債(有利子負債－現金預金)の水準は2年前の918億円から320億円にまで減少いたしました。この間、自己資本比率は14.8%から29.2%に改善しています。

Q2 2015年6月期の見通しをご説明ください。

戦略的な研究開発投資の増加等により、減益を予想

2015年6月期の売上高見通しについては、FPD製造装置は、「テレビ用有機EL製造装置」への投資が延期・縮小傾向にあり、前期比減少する見込みですが、半導体及び電子部品製造装置の需要拡大が続くこと等から全体としては、前期比微増の1,750億円を予想しています。

一方、利益面につきましては、成長に向けた戦略的な研究開発投資を増加させること、価格競争のさらなる激化を見込んでいること、特別利益の計上を見込んでいないこと等から前期比減益となる営業利益90億円、経常利益85億円、当期純利益65億円を予想しています。

開発力と営業力を強化し、成長フェーズへ転換

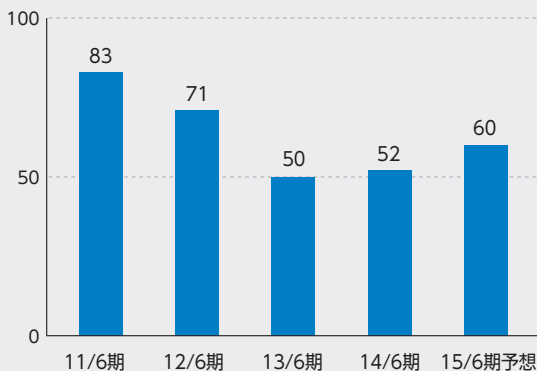
アルバックは2015年6月期より「構造改革から成長フェーズへの転換」をテーマに掲げ、「開発力の強化」と併せて「営業力の強化」に取り組んでいきます。損

益分岐点売上高の上昇を極力抑えるべく、「コスト競争力の強化」を進めていきます。

「開発力の強化」では、将来の成長に向けた新しいビジネスを開拓すべく、3年から5年先を見据えた8つの重要領域を設定しました。具体的には、当社の得意分野である「不揮発性メモリ」、超微細化配線に対応した「半導体」と高密度な「実装技術」、省エネルギー化に寄与する「LED」「パワー半導体」、環境性能の向上や操縦の自動化が進んでいく「自動車関連」、次世代の要素技術を必要とする「フレキシブルディスプレイ」、再生可能エネルギーとして中長期の需要が見込める「太陽電池製造装置」、の8領域です。

そして「営業力の強化」として、前述の「営業本部」の機能をさらに強化し、日本・海外におけるビジネスユニットごとの営業戦略を打ち出し、これに基づいて各国の営業部門が協調し合いながら営業活動を展開していきます。

3. 研究開発費の推移・予想 (単位：億円)



4. 中期経営計画 数値目標 (単位：億円)

	13/6期実績	14/6期実績	15/6期予想	16/6期目標	17/6期目標
受注高	1,668	1,698	1,700	1,900	2,000
売上高	1,634	1,739	1,750	1,900	2,000
営業利益	61	120	90	130	160
営業利益率	3.7%	6.9%	5.1%	6.8%	8.0%
経常利益	63	134	85	120	150
当期利益	-38	115	65	90	110

Q3 中期経営計画の見直しについてその背景や内容についてご説明ください。

現中期経営計画は、2013年6月に「価値創造型ビジネスモデルの再構築(真空技術を核とした付加価値を高める仕組みの再構築)」、「不採算事業の見直し」、「損益分岐点売上高の引下げ」を基本方針として、「確実・安定的に収益確保できる体制の確立」をめざし策定したものです。

事業領域については、「FPD及びPV製造装置」「一般産業用装置」「コンポーネント」が継続的に下支えする中、「半導体及び電子部品製造装置」が成長を牽引していくシナリオとなっております。

初年度にあたる当期につきましては、受注高・売上高は当初予想を下回りましたが、営業利益・経常

利益・当期純利益は当初予想を上回る結果となりました。

2015年6月期以降も、現中期経営計画で掲げる基本方針や事業領域に関する基本シナリオについては変えることなく事業を推進してまいります。①戦略的な研究開発投資を当初想定より増加させること、②FPD及びPV製造装置の市場で、当初想定していた「テレビ用有機EL製造装置」への投資が延期・縮小傾向となってきたこと、③今後の価格競争環境についてより厳しめに見込んだこと、等から数値目標の見直しを行うとともに、最終年度を1年延長することといたしました。

Q4 グローバル化への対応を強化するために、どのような体制づくりを進めていますか？

海外生産機能を最適化し、品質保証体制を構築

営業面については、日本・海外の営業活動を統括する「営業本部」体制についてご説明申し上げましたが、生産面では2013年7月に「グローバル生産企画室」を設置しています。その目的は、アルバックグループによる日本・海外の生産活動全体を俯瞰し、地域ごとに最適な生産能力の規模と配置を検討しながら、生産拠点間の機能分担と連携を図っていくことにあります。

また、グローバルなアルバックブランド・品質保証体制を強化し、ISO9000/14001グローバル統合認証の導入を積極的に進めるなどアルバックグループの品質・安全性の向上に努めています。

グループ全体でものづくりのマンパワーを向上

グローバル対応を進めていく上でカギとなるのは、やはり人材育成です。生産現場における技術力や管理能力のレベルを引き上げ、全世界の拠点で高品質なものづくりを実現するべく、アルバックでは2014年から「ULVAC Globalものづくり研修会」をスタートしました。中国や東南アジアのグループ会社10社から生産関連部門の人員を集め、「ものづくり」の考え方について研修を行うものです。

このような取り組みや、エンジニア教育などへの注力により、アルバックグループ全体でものづくりのマンパワーを高めながら、組織を活性化させる人事評価制度の導入等も進めていきます。

安定した企業体質を築き上げ、事業を持続的に発展させていきます。

Q5 CSR・環境関連活動については、どのようにお考えですか？

製品づくりを通じて世の中の環境保全・省エネに寄与

アルバックの事業は、環境保全やエネルギー問題の解決に寄与する多くの製品を創出し、供給していくことで、社会に貢献しています。また、製造装置メーカーとして、低コストかつ高性能のデバイス生産

を支えていくとともに、新たなデバイスの可能性を追求する研究開発に注力し、産業界の発展をサポートしています。

最近におけるトピックスとして、SiC(炭化ケイ素)を用いた次世代パワー半導体の量産技術確立をめ

ぞすTPEC(つくばパワーエレクトロニクスコンステレーション) 設立にあたり、産業技術総合研究所殿、富士電機株式会社殿とともに日本経済団体連合会会長賞を受賞しました。SiCパワー半導体は、省エネ革命を担うキーデバイスであり、ハイブリッド車・EVにおけるインバーター用途を中心に期待が高まっています。

この他にもアルバックでは、世界初の一貫量産技術を開発した薄膜リチウム二次電池など、省エネの最先端デバイスへの取り組みを強化しています。さらに今後は、高輝度LEDや有機EL照明の製造装置、太陽電池の変換効率を高めるイオン注入装置への注力などを通じて、世の中の環境保全・省エネに一層寄与していきます。

教育体制を充実し、社会に貢献する「人づくり」を推進

製造装置メーカーとして果たしていく社会的貢献の基盤となるのは、アルバックがこれまでに培ってきた技術力に他なりません。また、多様性を意識した人材交流を行い、その活躍の舞台を海外に拡げていくため、社員教育への取り組みが重要となってきます。

そうした観点から社内では、一般社員を対象とする「エンジニアリング教育」を実施し、技術の継承を図っています。また、当期は管理職層を中心とす



る「マネジメント教育」に注力していきました。今後は、グローバル人材の育成に向けた語学研修の実施など、教育体制のさらなる充実に努め、社会に貢献する「人づくり」を推進していきます。

Q6 株主様ならびにステークホルダーの皆様へのメッセージをお願いします。

皆様の期待と信頼に応える企業として、さらに前進

グループ全体が一丸となった事業構造改革の取り組みにより、アルバックはこの2年間で利益を創出する力を着実に高めてきました。

しかしながら、当期の普通株式の配当につきましては、市場環境が依然として不透明な中、これまで進めてきた事業構造改革をさらに推進するとともに、環境変化に耐えうる財務基盤の強化がなお必要な状況にあることから、誠に遺憾ながら無配とさせていただきます。株主の皆様には、深くお詫びいたします。

なお、2015年6月期の普通株式の配当について

は、現時点では未定とし、改めて公表いたします。何卒ご理解のほどお願い申し上げます。

これからは、確実・安定的な収益確保に努めつつ、成長フェーズへの転換に向けて、積極的な研究開発投資を行っていきます。そして、事業環境の変化を飛躍のチャンスと捉え、ものづくりの力とそれを支える人材及び組織の力を結集していくことで、新しい価値の創造に果敢に挑戦し、産業と科学の進化と発展を支えていきたいと思っています。

アルバックは皆様の期待と信頼に応える企業として、これからも前進してまいります。引き続き一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

持続的な成長に向けて

アルバックグループは、專業活動に関わるESG（環境・社会・ガバナンス）テーマを認識し、技術・組織・環境の取り組みテーマに応じた活動を推進しています。

アルバックグループに関わるESGテーマ

● 地球温暖化への対応



● グローバル化への対応



● 地域コミュニティとのつながり



アルバックグループの事業

真空機器事業

FPD・PV
製造装置

一般産業用
装置

半導体及び
電子部品
製造装置

コンポーネント

真空応用事業

材料

その他



アルバックグループの 取り組みテーマ

技 術



技術特集 TSV実装

- アルバックブランドの向上
- 構造改革と一貫した調達活動
- グローバル事業展開
- グローバル知的財産

環 境



- 環境配慮製品の開発
- 環境コミュニケーション活動

組 織



- 人事制度改革・教育・メンタルヘルス
- CSR社員意識調査
- 労働安全衛生
- コーポレートガバナンス/
コンプライアンス/
リスクマネジメント
- 企業市民活動

CSRの活動実績と目標一覧

アルバックグループは、「独創的な先端技術を持って産業と科学の発展に貢献する」という経営理念の下、独創的な技術を世界中に提供するとともに、アルバックが保有する技術や人材を活かし、社会のさまざまな課題を解決するための活動を行っていきます。

ステークホルダー	コミュニケーション ガイドライン	2013年度の目標
お客様	お客様との信頼関係を重要視し、品質・安全性の向上に取り組んでいます。	<ul style="list-style-type: none"> ・クレーム管理システムの見直し (ULKES-QMS) を行う。 ・ISO9000/14001のグローバル統合認証の導入を推進する。 ・品質検査の仕組みの見直しを行う。
お取引先	適正かつ公正・公平な取引関係を維持促進し、相互に確かな信頼関係を築けるよう努めています。	<p>事業部の構想設計段階におけるDR (デザインレビュー) に参画し、前工程におけるコストダウンによりアルバック・グループ連結コストを削減する。</p> <p>認定サプライヤー制度により受入検査の簡略化を推進し、品質の安定供給に努める。</p>
株主・投資家	企業活動や財務情報の迅速な開示に努め、株主・投資家の皆様と積極的なコミュニケーションに取り組んでいきます。	<p>コーポレートコミュニケーションを積極的に推進する。 アナリスト・投資家対応件数を増やす。</p>
社員	多種多様な働き方をしながら安心して快適に働ける職場づくりに取り組んでいきます。	<p>継続してCSR意識調査を実施し、社員の意見を多く取り入れCSR活動を推進する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・考課制度変更に伴う評価者研修を実施し、制度の実質的な浸透を図る。 ・社員のライフワークバランスを向上させるための労務管理研修を実施する。 ・健康管理規程にもとづく健診事後措置を徹底し、健康リスクの低減を図る。 ・メンタルチェックを実施し、有所見者に対し面談を実施することにより、メンタル不調者発生の防止を図る。 ・メンタルヘルス研修を継続実施し、働きやすい職場づくりをめざす。 <p>—</p> <p>労働災害発生の度数率ゼロを継続する。 製品事故発生件数の半減をめざす。</p>
環境	地球環境の保全を人類共通の課題の一つととらえ、環境に配慮した事業活動に取り組んでいきます。	<p>環境負荷の削減に貢献する製品を開発し販売する。</p> <p>事業所の環境負荷の低減を図る。</p> <p>環境活動に対し積極的な参加と意識の向上を図り社会貢献を行う。</p>
地域社会	各国・各地域の習慣・文化に根ざした社会貢献活動に取り組んでいきます。	<p>5年目を迎える田んぼプロジェクトでは、1イベント100名の参加を目標とし、より地域とのコミュニケーションを促進する。</p> <p>社会貢献活動方針を策定する。</p>

◎計画以上成果を達成、○「達成」及び「予定通り進捗」、△努力を要する、×さらなる努力を要する

2013年度の実績	2013年度自己評価	2014年度の目標
<ul style="list-style-type: none"> 10月から新しいクレーム管理システムに移行した。 2014年度から導入するグローバル統合認証の準備を行った。 フロントローディングに沿った品質検査に見直した。 	○	<ul style="list-style-type: none"> ISO9000/14001のグローバル統合認証(Phase1)を確実に実施する。 フロントローディングに沿った品質検査を定着させる。
事業部のDR(デザインレビュー)に参加。3S視点でコストダウン提案を行い成果があった。 購入品 8.7% 製作品 7.9% どちらもアルバック+アルバック東北(株)+アルバック九州(株)	○	事業部の構想設計段階におけるDRに参画し、前工程におけるコストダウンによりアルバック・グループ連結コストを削減する。(購入品8.0%の継続 製作品 各事業部へのコストダウン提案)
認定サプライヤー制度により品質の安定供給を図ることができた。	○	—
個別対応以外に施設見学会、テクニカルセミナーを開催し、多数の出席を得た。	○	コーポレートコミュニケーションを推進するとともに、中期経営計画の進捗に関する情報開示を継続的に行う。
継続してCSR意識調査を実施し、回答率60%以上に対し、実績61.2%と達成できた。	◎	CSR意識調査項目の見直しを行う。
①評価者研修を2014年7月に実施。実際の目標立案に関する具体的な指針を示した。 ②計画変更をし、研修実施ではなく労務管理責任者設置により適切な管理ができるようにした。 ③健康リスクの高い医療指導対象者への対応率は、目標90%以上に対し、実績92.2%であった。 ④メンタルチェック有所見者への面談対応率は、目標95%以上に対し、実績97.5%であった。メンタル不調者新規発生件数は、昨年に続き、低水準で維持。 ⑤メンタルヘルス研修は、目標33.3%を達成する受講者数であった。	①○ ②△ ③◎ ④◎ ⑤◎	<ul style="list-style-type: none"> 人事ローテーションや組織再編に向け、全社的なヒアリングを実施する。* 技術者に対する研修体系を整え、確実なスキル習得をめざす。 医療指導対象者への面談などの対応を継続し、さらなる健康リスクの低減を図る。* ストレスチェックの法制化を視野に入れ、不調者の早期対応と職場改善が達成できるチェック体制を作り展開する。* メンタルヘルス研修を通じて、職場のコミュニケーション活性化とモチベーションの向上を図る。*
—	—	<ul style="list-style-type: none"> グループ共通の教育プログラムを整備する。 個々の社員をつなぐグループ共通のものづくりに対する価値観を整理し、アルバックで働くことの魅力をグループ社員全体で共有する。
①前年度より継続して労働災害発生度数率ゼロを達成し、2014年6月に厚生労働省より第2種無災害記録の認証を得た。* ②製品事故発生率は、前年度より48%減少した。(グループ全体)	①◎ ②○	①アルバックグループの労働災害発生件数について、前年度より半減を目指す。 ②アルバックグループの製品事故発生件数について、前年度から継続して低い水準を維持する。
アルバック・クライオ(株)では①22型、16型クライオポンプのマルチ運転化を行えるようにした。22型では45%、16型では52%の消費電力の削減を図ることができる。 アルバックではHELIOT900シリーズをリリース。リークテストの精度を向上させることで、微小なリークによる機器の不良による廃棄に伴い処理されるフロン類の廃棄量を削減することができる。	○	環境負荷を低減する為の製品の開発を引き続き推進する。 例) <ul style="list-style-type: none"> 消費エネルギー量が少ない製品 資源投入量が少ない製品 製品含有化学物質規制に対応する製品
アルバックでは省エネプロジェクトを立ち上げ、2012年度比16%の省エネをめざし活動を開始した。	◎	アルバックグループで2012年度に対して5年間で10%のエネルギー使用量の削減を行う。
アルバックグループ(茅ヶ崎地区)2013年度の田んぼプロジェクト(田植えイベント)では165名が参加した。	◎	田んぼプロジェクトでは新たに茅ヶ崎の田んぼの生き物を紹介するアルバックの田んぼ自然図鑑の作成を行う。
2014年1月、アルバックグループ社会貢献活動方針及び重点課題を定めた。	◎	アルバックグループ各社に対し、取り組みを紹介し活動を推進していく。

※アルバック単体の取り組み

情報のスマート化を支える「TSV実装」



(中) 谷 典明 半導体電子技術研究所 副所長 兼 第3研究部長 兼 第5研究部長
 (左) 森川 泰宏 半導体電子技術研究所 第3研究部第1研究室長
 (右) 松本 昌弘 半導体電子技術研究所 第5研究部第2研究室長

アルバックにとって2014年度は、成長フェーズへ向けてシフトする重要な年。開発を強化し、次世代のビジネスの柱を育てていきます。

ここでご紹介するのは、アルバックの重要領域戦略開発の一つであるTSV(Si貫通電極(Through-Silicon via))技術と3次元実装パッケージです。この技術は情報量が加速的に増加する中、多くの情報をより高速に通信できるようにするという、クラウド社会には欠かせない重要な役割を担っています。この分野の開発に携わる3人に技術と将来の展望を語っていただきました。

⇒ 真空とTSV・3次元実装パッケージ

アルバックは、スパッタリング装置^{※1}、アッシング装置^{※2}などのウェハープロセス用の装置の販売実績を活かして2008年頃から開発をはじめ、2010年に低コストTSVターンキーソリューションの提供を開始しています。(森川)

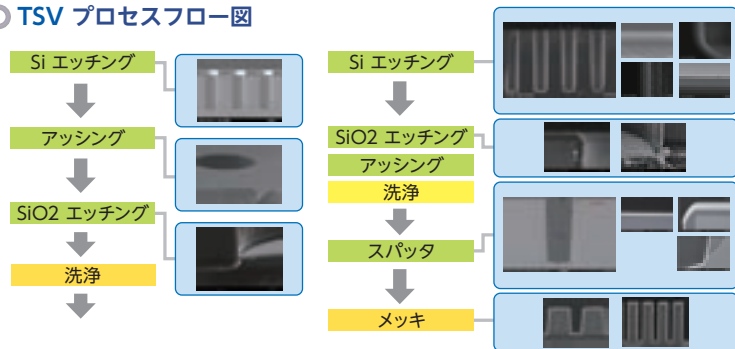
1990年代は、半導体デバイスを微細化すれば低コスト・低消費電力・高速化を実現できたのですが、現在では微細化が限界に近づいてきました。その技術に変わるのがTSVとパッケージの技術だといわれています。具体的には、微細化された複数のチップをひとつのパッケージとしてTSVで統合すれば、通信する配線の長さが短くなるため、高速に通信でき

るようになります。(松本)

特に、スマートフォンはここ数年で小型に省エネが進んでいますが、このTSVと3次元実装はこれらの性能向上に大きな影響を与えるのです。つまり、端末はより小さく、薄くなり、高速で通信できるようになるのです。(谷)



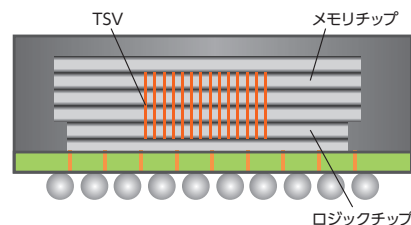
○ TSV プロセスフロー図



※1 スパッタリング装置 … アルゴンプラズマ中のイオンをターゲットに衝突させて、ターゲット表面の原子をはじきとばし、基板の上に薄膜を形成する装置です。

※2 アッシング装置 … 終わった後マスクに用いた有機材料のレジスト膜をプラズマで除く装置です。

○ TSV実装ソリューション



TSV実装とは … Si貫通電極 (Through-Silicon via)。シリコン製の半導体チップの内部を垂直に貫通する電極をすることで、上に積み上げたチップに信号や電源を高速に接続できるようにする技術です。

⇒ 事業部横断でいち早く次世代技術を開発



TSVと3次元実装パッケージの開発にあたっては、半導体・電子技術研究所の研究部門のメンバーとともに半導体装置事業部と電子機器事業部が連携し、研究部門の情報を事業部門と共有しています。

特にこの分野では、業界標準やロードマップが確立されておらず、お客様からのリクエストも流動的に対応にスピードも要求されます。

技術革新や市場やお客様のニーズが変化するスピードが加速している近年では、いち早く正確な情報を入力し、真空の総合メーカーとしての技術力でお客様の開発から製品の量産化まで幅広くサポートできるということがアルバックの強みだと思います。(森川)

例えば、スマートフォン向けには、TSVや3次元実装パッケージ技術だけでなく、より小型で長時間バッテリーとして期待されている薄膜リチウム電池やセンサーなどで使用されるMEMS技術などのアルバックの真空技術も提供できるのです。またアルバックでは、次世代技術として注目されているフレキシブルディスプレイも重要領域戦略開発項目の一つとして研究に力を入れています。(谷)

⇒ アルバックのTSV技術が社会へ広がる

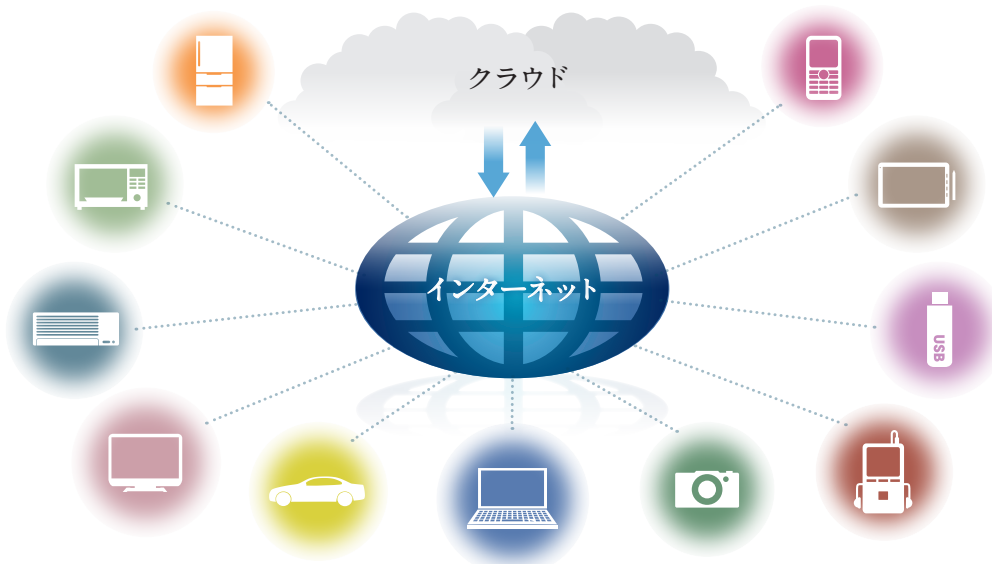


TSVと実装パッケージの技術は、まずスマートフォンやコンピュータなどのハイエンド機種向けに使われ、私たちの暮らしを支える様々な電気製品

に広がると予測しています。そしてそれらの電気製品は、モノのインターネット(Internet of Things : IoT)化において、アルバックでも開発をしているウェアラブル端末^{※3}などを通じて、あらゆる機器がインターネットを通じてつながり、より良い暮らしと社会のために役立つと考えています。(谷)

※3 ウェアラブル端末 … 身につけて持ち歩くことができる情報端末のこと。

○ あらゆるものがインターネットとつながる社会



アルバックブランドの向上をめざして

アルバックグループ製品の品質向上を追求しています。

アルバックグループは、品質マネジメントシステムの国際規格ISO9001の認証についてグループとして維持、管理するために、今後3年間をかけて統合していきます。多拠点化する製造拠点及びグループ会社において高品質な製品をグローバルに提供していきます。

また“アルバック品質”を維持するため、アルバックブランドの使用基準、認定制度を確立し、製造開始及び型式認定にあたって厳格なチェック体制を敷くとともに、製品の製造プロセスの各工程においても厳格なチェック体制を構築しています。

品質方針

「お客様の信頼は、品質の確保から」を基本スローガンに、我々は、常に世界ニーズを盛り込んだ商品・サービスを提供し、お客様の永遠のパートナーとして発展する。

行動指針

- ① 私達は全てのしくみ、手順を厳守します。
- ② 私達は次工程に対し不良品を出しません。
- ③ 私達は次工程に対し納期を守ります。
- ④ 私達は製造予算を守ります。

引き合い・受注段階からのリスク管理強化

フロントローディングを強化するために、営業部門、技術部門、設計部門と製造部門との技術・技能の連携、経験やノウハウの連携、知恵や閃きの連携、関連する情報・データの連携を図り、それぞれの成果を上流の開発設計プロセスに埋め込んでいく活動

に注力しています。

フロントローディングの本質は、研究開発・設計・製造・保守などモノづくりの全ライフサイクルにおける異質の要素を結合し全体最適を実現することであり、そのための仕組みの見直しを進めています。

品質情報に基づく迅速な改善

お客様に安心、満足していただける品質管理体制

アルバックの品質マネジメントシステムのコンセプトとして、リスク分析とフィードバックがあります。開発設計段階からの流れに沿ってリスクと対策アクションを特定し、品質不具合を予防しています。また、フロントローディングの強化に伴い、製造プロ

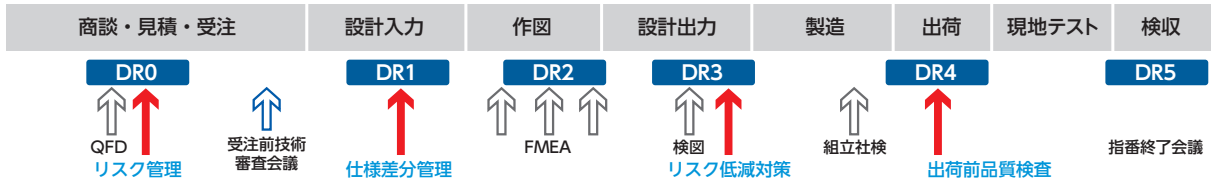
セスの各工程における品質検査及び出荷段階での品質検査にて厳格な検査を行っています。このような活動を通して、最新技術を反映した製品をタイムリーに提供し、お客様の生産活動へスピーディに貢献できることをめざしています。

不適合費用の削減

開発設計段階からのリスク分析、クレーム情報からのフィードバック、また上流設計力の強化など更な

るフロントローディングの推進により、不適合費用を抑制しています。

○ 開発設計の流れに沿った品質保証体系



■ DR0

顧客要求仕様・QCDリスク・開発要素の網羅的な把握

■ DR1~3

DR0の管理文書通り入力DRが行われているか
高リスクモジュール・ユニットの設計入力のQCDを確認

DR: Design Review(設計審査)のこと。

QFD: Quality Function Deployment(品質機能展開)とは、顧客の要求品質を細部の技術仕様まで展開する製品開発手法のこと。

FMEA: Failure Modes and Effects Analysis(潜在的故障モード影響分析)とは、製品に新機能を導入する、或いは工程を変更する前に実施する予防処置のプロセスであって潜在的な故障モードを体系的に分析する手法のこと。

QCD: Quality(品質)、Cost(コスト)、Delivery(納期)の頭文字をとったもの。生産の3条件。

■ DR4

社内検証項目の残件ゼロを確認

■ DR5

指番終了後の振り返りを行い、収支、トラブル対応等、以降の受注に活かす

アルバックブランドのグローバル化

アルバックグループ製品は、製品ごとの型式登録から、販売商流の明確化と製品ごとのアルバック商標の使用基準に対する適合性、各製品・各製造拠点での品質・環境・安全・有害物質等の管理体制等の仕組みに加え、知的財産の保護や技術流出予防処置等を含むチェックリストに基づく評価を行い、その基準を満たした製品のみ製造、販売が許可されます。

それらをアルバックグループ製品の製品・製造・販売マトリクスとして維持管理しています。このような厳格な制度を通じてグローバル化に対応した“アルバック品質”を世界中にお届けしています。

今年度からは、3年間をかけてアルバックグループ各社のISO9001認証を統合しグループ各社の品質向上をめざすとともに、高品質な製品を提供していきます。

製品安全

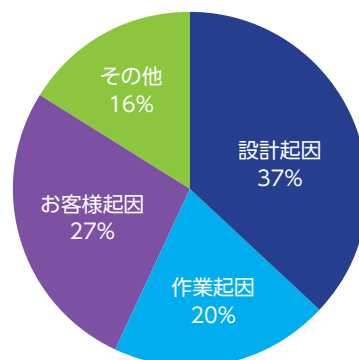
従来から実施されてきた種々の施策により製品事故は着実に減少しています。一方、お客様の装置性能に関するご要望にお応えするため、開発設計の重要性がより高まっており、今年度は、設計者向けの

機械安全教育を実施することによりアルバックグループ製品の安全性の向上を図り、グローバルなレベルで製品の製造から取り扱いに至る全ての人を対象とした製品事故の撲滅をめざします。

海外での品質検査の風景



○ 製品事故発生原因の内訳



アルバックグループのグローバル知的財産

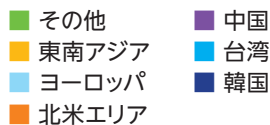
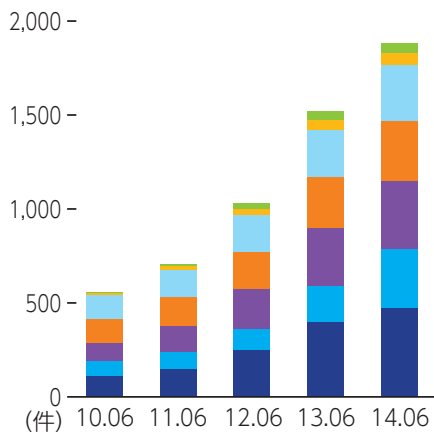
アルバック知的財産のグローバル(アジア)戦略

アルバックグループは「グループ会社製品の知的財産権保護」と「第三者の知的財産権を尊重」を基本的な知的財産戦略としています。アルバックグループの海外特許登録件数は、海外販売比率、製造拠点の増加と共に知的財産権取得も海外での権利化が進み、2013年度末では海外の特許登録件数は1,900件弱となり過去最高の累計登録件数になりました。特に海外製造拠点や顧客が多い韓国、中国、台湾を中心にアジア圏が特許登録件数全体の約65%を占めており、大きく増加致しました。また、模造品対策のために意匠登録や、ブランドを守るために商標登録も進めています。

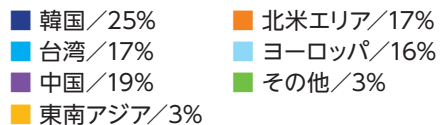
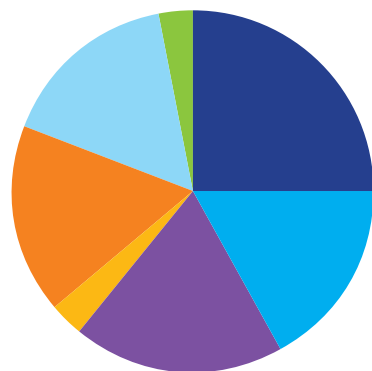
第三者の知的財産権侵害に対しては、開発商品・企画段階の先行技術調査と商品群毎に定期的な特許調査を行っています。研究・開発部門では実験試

作段階から特許出願を進め、設計、製造に至るまでに応用特許・意匠登録などを進めてグループ内の知的財産保護を進めています。グループ内では知的財産権の教育やグループ会社間の定期的な会議を通して教育や情報交換を実施しています。今後、より客先に近いところでの装置開発や設計もアジアを中心とした会社で加速され、知的財産権の争奪は重要な経営資源として重要視されています。アルバックでは、効率的な特許出願と質の高い外国出願を目標にして、更に、主力製品に対する特許出願を推進しています。また、事業計画との関連性を評価し、販売計画、マーケティング情報をもとにした外国出願の選定なども行い、さらなる知的財産権の強化を進めていきます。

○ 海外特許権登録件数 (累積)



○ エリア別海外特許登録



構造改革と 一貫した調達活動

コストダウン推進活動

2014年度も3S、グローバル生産(調達)、コストダウン活動を推し進めサプライヤー様との共存共栄をさらに構築し、アルバックの収益改善に取り組めます。また、ものづくりの原価低減を念頭に置き事業部を横断したコストダウンの取組みとしてワークショップ形式で実践と教育活動を行いコストダウンを推進します。

コストダウンワークショップ

コストテーブルとコストベンチマーク手法を用いてもものづくりにかかる費用の見える化を行います。

データを共有化してアルバック及びアルバックグループで活用することで見積もり及び製作プロセスの見直し等による効率的なコストダウンが期待できます。

コストテーブルとは

1個の部品について原価構造を算出
「材料費、加工費等詳細に算出」

『コストを正しく評価するための“ものさし”』

コストテーブルに材質・外形寸法等を入力すれば価格の算出ができ、見積りが適正かつ迅速に評価できます。

経験の浅い人でも適正原価を算出でき、サプライヤー様との価格交渉に活用できます。



コストテーブル勉強会風景

コストベンチマークとは

違う形状の部品を同じ定義で価格評価

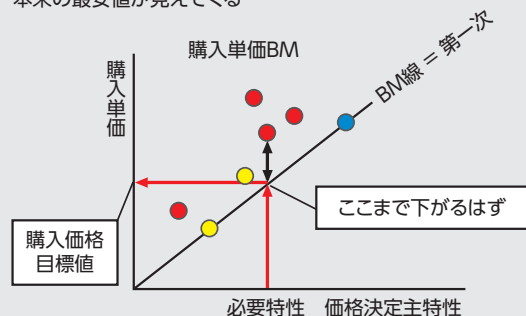
『異形状部品とのコスト比較』

類似製品を同軸上のグラフに表示することで、形状の違う加工品とコストを比較します。

相対的に比較して高く購入していた部品を抽出でき、次の装置の原価低減の切り口を明確にできます。

BM手法

類似製品を価格決定特性を横軸にして
縦軸に購入価格をとることで
本来の最安値が見えてくる



調達リスク低減活動

部品のサプライチェーンを管理し、災害時における特に重要な製品・サービスに供する部品の供給リスクを最小化する活動に取り組みます。サプライヤー様と連携して情報を共有化し調達リスク低減に向けてサプライヤー様と共に取り組んでいきます。

調達BCP基本方針

- 部品のサプライチェーンを管理し、災害時における特に重要な製品・サービスに供する部品の供給リスクを最小化する。
- BCP管理項目：
 - 大規模地震および津波
 - 河川の氾濫などによる洪水
 - 大規模な火災・爆発など
 - 調達先国の戦争・紛争および政情・治安の悪化

① 顧客の事業継続に供する製品・サービス(公共サービスを含む)

② 事業部の中期計画における重要機種

対象製品・サービスの決定	2013	2014	2015
Step1 対象製品洗出し			
Step2 対象製品洗出し			
サプライヤー体制評価・改善			

紛争鉱物問題への対応

アルバックグループでは、これまで法令の順守や公正で自由な競争の維持促進、サプライヤー様との健全で良好な関係について「アルバックグループの調達基本方針」を掲げてまいりました。今後ともサプライ

ヤー様の皆さまとさらなるパートナーシップの構築とサプライチェーンとして社会的責任を果たすことを目的に、紛争鉱物問題への対応と下記9項目を新たに掲載し皆様をお願いさせていただいております。

- | | |
|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ① 法令・社会規範 ② 公正な取引と企業倫理 ③ 人権尊重と労働・安全衛生 ④ 製品・サービスの安全性・品質 ⑤ 情報セキュリティ | <ul style="list-style-type: none"> ⑥ 環境保全 ⑦ 適正な価格・納期の実現 ⑧ 技術力の向上 ⑨ 健全で安定した企業経営 |
|---|--|

1項の法令・社会規範で取り上げている紛争鉱物については下記を参照ください。

【紛争鉱物】

アフリカ・コンゴ民主共和国及び近隣諸国での鉱物の中で、その採掘や取引が武装集団の資金源となっており、あるいは人権侵害、労働問題等の根源になっているものを「紛争鉱物」と呼びます。2010年7月に米国で成立したドット・フランク法により、米国の株式公開企業はこれに該当する製品への使用状況について報告

書の提出と開示が義務付けられました。アルバックグループにおいては、紛争鉱物に関する取り組みを企業としての社会的責任ととらえ、不正な資金、または非合法な方法により採掘・採取された紛争鉱物を使用した原材料、及びこれらが含有される部材・部品等の不使用に向けた取り組みを行っています。

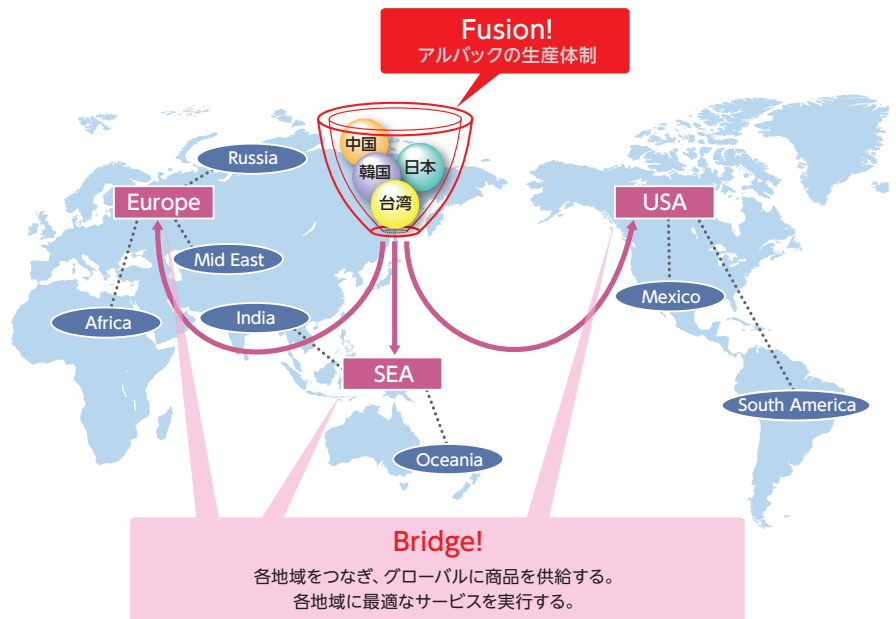
アルバックグループのグローバル事業展開

多様性を強みにするアルバックグループの生産体制。

日本のものづくりと海外生産でのコストメリットを融合させるべく、アルバックグループは東アジアを中心に、積極的に海外進出を行ってきました。近年では日本だけでなく、韓国や台湾のお客様も中国に生産拠点を構えるなど、アジア地域のものづくり市場は多国間での連携が必要不可欠な時代となってきており、さらにその地域も東南アジアまで拡大させてきています。今後、人口の増加・産業のさらなる発展が見込まれる東南アジアのような多様性の高い地域においては、画一的なビジネス手法ではお客様のニーズに応え切れない部分があります。現地のニーズにスピーディーかつ柔軟に対応するため、今後東南アジア地域の包括的なコントロールを地域内部で効率的に行っていく体制を構築していきます。

また各国のサービス拠点はより一層現地のニーズ把握に注力し、グループ一体となって真空事業のさらなる拡大をめざしていきます。

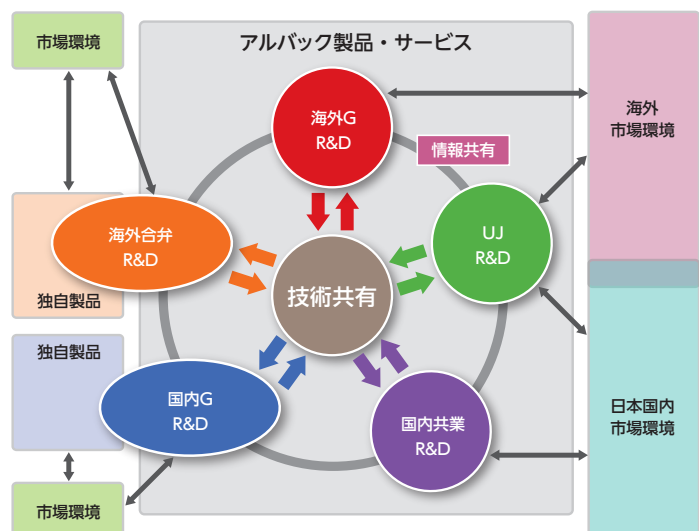
東アジアを基軸とした生産体制



グループ一体となった技術資産体制の構築。

真空装置の開発については、これまで日本本社にて行ってきました海外市場でのシェア拡大の為、現地の要求に柔軟かつスピーディーに対応ができる開発体制が必要となってきており、アルバックグループとして、海外での積極的な開発活動を促進していきます。アルバックグループでは海外での特許出願を積極的に推進するだけでなく、グループ製品に関する権利を明確してポートフォリオで管理することで、海外グループ各社を含め知的財産の有効活用を促していきます。アルバックグループ一体となって、製品販売・サービスと開発権限を一元管理、保有するとともに開発情報を共有することで有効的なR&D活動を推進し、より一層お客様のニーズにお応えする体制を構築していきます。

開発体制 イメージ



総合力を活かしたものづくりと人材育成。

アルバックグループは創業以来60年以上にわたり、真空事業の発展に寄与してきました。

日本の製造業に携わる他の企業同様に、生産技術、質の高いサプライチェーン、ものづくりに対する思いを、社員と協力業者の方々と共に育んできました。60年以上の経験と知識を国内外の若き社員に伝承していく為、アルバックグループの日本国内の生産拠点の一つである「アルバック九州(株)」において「ULVAC Globalものづくり研修会」を開催しました。中国や東南アジアのグループ会社10社、28名の幹部候補の社

員が参加し、生産技術や生産システム、ものづくりの考え方について、各社間の交流を深めつつ、集中的に学習する機会を設けました。研修の参加者は実際のものづくりの現場を目にしながらものづくりの考え方を学習し、今後海外各国に点在する自社の事業において展開を行っていきます。このような国際的な学習の機会を今後も積極的に設け、アルバックグループで育んできたものづくりの知識や経験を国内グループ及び新興国を含めた海外での生産活動に、有効的に活かしていきます。



ULVAC Globalものづくり研修会参加メンバー



ULVAC Globalものづくり研修会風景

VOICE

ものづくり研修会参加者の声



愛発科真空技術(蘇州)有限公司
顧副総経理

特にサプライヤーさんの現場で行われていた生産管理や品質管理の方法は、今まで中国では見たことがなかったので、先進的で大変勉強になりました。この研修で、世界中のアルバックグループのみなさんと議論を重ね、アルバックのものづくりに対する意識の高さを感じました。今後の中国のものづくりのレベルアップに期待してください。

日本のアルバックの社員の方々が、ルールを重んじ、スケジュール通りルールを守り、真剣に仕事をされている姿が印象的でしたし、何よりも皆さんの情熱に感動いたしました。生産管理システムについて自社でも生かしていきたいと思えます。

愛発科東方真空(成都)有限公司
蒲部長



愛発科真空技術(蘇州)有限公司
李主事

品質管理手法(なぜなぜ分析、FMEA等)や、工場見学、特に加工現場の自動化が印象に残りました。今回の研修で学んだ内容を、会社の具体的の実例を用いて社内教育を行っていききたいと思います。



※茅ヶ崎市行谷付近：5年目になる田んぼプロジェクト実施場所

環境

Environment

地球環境に貢献するアルバックグループの取り組みとして、環境配慮製品の紹介やさまざまなグループの取り組みを紹介します。

グローバル環境管理の推進と環境負荷の最小化を目指して

アルバックグループは「省エネ・省資源・環境保護に貢献できる商品の提供」という環境方針のもと、お客様の手元で最大限の環境貢献が出来る製品の開発、製造に力を入れています。また、事業活動を行う中で消費するエネルギー、排出する廃棄物の管理を徹底的に行い、事業活動の中から発生する環境負荷を最小限にすることを目標に活動を行っています。

アルバックグループの環境経営

アルバックグループはアジア地域を中心に、欧米、中南米等幅広い地域で展開し、グローバルな生産体制を有していることから、グループ間の情報の共有、トップマネジメントによる指示の素早い展開などを確実に行う必要があります。その為、従来は各社で取得

していたISO14001の認証をグローバル統合化し、グループとしてのガバナンスの強化を図ることにしました。

今後も、アルバックグループは「ULVAC」製品を通し環境負荷の削減を図っていきます。

● アルバックグループ 環境理念

アルバックグループは、地球環境の保全が人類共通の重要課題のひとつとして捉え、事業活動のあらゆる面で環境の保全に配慮し、住みよい地球と豊かな社会の発展に貢献します。

● アルバックグループ 環境方針

省エネ・省資源・環境保護に貢献できる商品の提供

1. 製品(アルバックグループ製品・最終製品)の省エネ・省資源・環境保護
2. アルバックグループ製造プロセス(工程)における省エネ・省資源・環境保護

環境配慮製品

(株)アルバック

地球温暖化効果ガスの放出抑制に貢献するリークディテクタ HELIOT900シリーズ

リークディテクタはヘリウムガスを利用して漏れ検査をする装置です。ヘリウムリークテストは最も信頼性が高いリークテスト法として、さまざまな製品の検査で広く使用されています。中でも空調、冷凍、給湯システムなどの冷媒ガスを充てんする製品については、ヘリウムリークテストは欠かせないものとなっています。

冷媒ガスはオゾン層破壊、地球温暖化に深刻な影響を与えることから、既に特定フロン(CFC)から代替フロン(HCFC)に置き換わり、現在ではより環境負荷の小さい新冷媒HFC冷媒が主流となっています。しかしHFC冷媒はODP(オゾン破壊係数)には優れた特性を示すものの、GWP(地球温暖化係数)

が高いという課題があります。そのため家電リサイクル法、フロン回収破壊法など製品廃棄時の回収に加え、製造段階での排出抑制策も必要となります。ヘリウムリークテストによって冷媒ガス充填前に不具合品を検査できるほか、製品が廃棄されるまでの間に微小漏れによって環境へ排出される冷媒ガスも減らすことができ、地球温暖化の大きな要因である冷媒ガスの封じ込めに大きく貢献しています。



リークディテクタHELIOT 901W1

VOICE

部門の垣根を越えチーム一丸となって開発

今回の開発においては、メインの心臓部である分析系と排気系の変更による測定性能の向上と、使い勝手、洗練されたデザインにこだわりました。

特に、性能、操作性、デザインすべての面で、目標を達成するまでにいくつかの技術的なハードルがありました。技術開発、設計、製造、プロダクトマネージャーが垣根を越えてさまざまな意見を出し合い、乗り越えることができました。

今後もチーム一丸となって改良を続け、性能をブラッシュアップしていきたいと思えます。販売に関しては、日本やアジアのみならず、競合がひしめく欧米地域にも今後積極的に拡販を行っていききたいと考えています。



HELIOT 900シリーズ 開発メンバー



● アルバックグループの環境への取り組みの詳細が確認できます ▶ <http://www.ulvac.co.jp/csr/>

「田んぼプロジェクト」5年目を迎えて

アルバックは、本社・工場を置く神奈川県茅ヶ崎市にて、地域貢献活動の一環として、茅ヶ崎市のご協力のもと、「田んぼプロジェクト」を2010年に立ち上げました。2011年からは文教大学湘南総合研究所にもご協力をいただき徐々に活動も拡がり、今年で5周年を迎えることができました。

「田んぼプロジェクト」は、茅ヶ崎市行谷(なめがや)地区で農地を所有されている野中氏のご協力を得て、文教大学の学生や地域の皆様とともに田植えから収穫までの活動を行うものです。このたび5年目を迎えた活動のあり方をテーマに、茅ヶ崎市行谷の田んぼで座談会を行いました。



座談会出席者

順不同・敬称略

農作業指導

野中 和幸

文教大学湘南総合研究所 所長

岡野 雅雄

茅ヶ崎市 経済部農業水産課

平山 源太

(株)アルバック 総務部

山元 美穂

(株)アルバック 環境・安全部

伊田 健助

司会進行

(株)アルバック経営企画室 広報・IR室長

臼見 隆行

「江戸時代の農業をやろう」と手作業でスタート

臼見 はじめに、皆様のご協力を賜りおかげ様で「田んぼプロジェクト」は、5周年を迎えることができました。ありがとうございます。まず田んぼプロジェクトリーダーの山元さん、田んぼプロジェクトについての概要を教えてください。

山元 このプロジェクトは、茅ヶ崎市の耕作放棄地などの農業・環境問題の解決と、当社の地域貢献活動および社員のリフレッシュによる福利厚生を結び付けたもので、私はプロジェクトリーダーとして全体をサポートしています。

初年度は1面だった田んぼは5年間で4面(約328坪)に増え、田植えの参加者は170名を超えるまでになりました。地元の蔵元の御協力のもと収穫によるイベントも拡がり、今年は新たにもち米を植えています。また、社員や地域の子供たちを集め、田んぼで開催する「自然観察会」も毎回にぎわっています。

臼見 参加者が増えてきたのは嬉しい限りです。それでは、皆様とこのプロジェクトの関わりについて教えてください。

平山 茅ヶ崎市では耕作放棄地の増加に対処すべく、

「農業・漁業体験プロジェクト」「耕作放棄地解消ボランティア」といった活動を実施し、自然に親しむ機会として市民の皆様に参加いただきつつ、農地復元につなげていく取り組みを行っています。また、耕作放棄の未然防止を目指し、意欲ある農業者の方々と農地の賃貸借をマッチングさせる「農用地利用集積」にも力を入れています。

この「田んぼプロジェクト」では、アルバックさんから茅ヶ崎市にご相談を受け、農地を所有されている野中さんや文教大学の岡野先生をご紹介し、活動における情報提供などを通じて引き続きお手伝いしています。

野中 この田んぼは20年近く休耕状態で、私自身も農業専門に従事していたわけではなく、茅ヶ崎市からお話をいただいた当初は、役目が務まるか不安がありました。しかし、今では大きな楽しみとして取り組んでいます。耕運機や脱穀機なども手放していたので、「江戸時代の農業をやろう」と考え、代掻き(田植えの前に水を入れて土塊を砕く作業)から手作業で始めました。

肥料の分量なども見当がつかず、はじめは獲れた米

「田んぼプロジェクト」5年目を迎えて

粒も小さなものでした。一昨年から茅ヶ崎市の農業水産課に提供していただいたレンゲの種を蒔き、緑肥として用いています。

自然に親しみ、生命の尊さを学ぶ機会として

伊田 「レンゲが田一面に生い茂り、たくさんの蝶々が舞う。」昔ながらの田畑が少なくなりましたが、見て楽しくなる光景ですよね。5年経って、ここの環境も変わりました。

野中 植生や生物相がかなり変化しました。生き物の種類も増えています。地域の子供たちには、この花畑の中は自由に入って遊んでいいよ、と言っています。伊田さんがリーダーとして企画されている「自然

観察会」で、子供たちが笑顔を見せてくれるのが嬉しいですね。

伊田 今の子供たちは、水槽の中で飼われていたり、店で売られている生き物を見たことがあっても、自然の中に棲んでいる生き物を直接手で触れる機会は、少なくなっています。私は、自然観察会という生(なま)の体験を通じて、自然に親しみ、生命の尊さを学んで

ほしいという気持ちがあります。

また、この土地も人の手が入ったことで、代掻きの時に多く見かけたオケラが減少したり、当初群生していた茅萱(ちがや)が背の低い植物に代わり、トンボや蝶々が増えるといった変化が生じています。そうしたことにも気づいていただき、多くの方々にとって自然との共存ということを考えるきっかけになればいいですね。こうした取り組みの一環として、茅ヶ崎市に棲む生き物をまとめた図鑑を作りたい、というアイデアを温めており、今年からプロジェクトをスタートさせました。

野中 鳥たちもずいぶんいろんな種類が来ますよ。キジ、コジュケイ、マガモ、カルガモ、ゴイサギ、シラサギ、アオサギなどをよく見かけますね。

若い感性に刺激を与える田んぼ

白見 「田んぼプロジェクト」には、文教大学湘南キャンパスから多くの学生さんに参加いただいています。岡野先生は、どんな変化を感じていますか。

岡野 本学からの参加学生は初回が20名ほどで、その後は多くなかったのですが、今年の田植

えでは約50名となりました。校外活動は目的が必要となりますが、この「田んぼプロジェクト」については、「休耕地の復活」「企業の社会貢献活動」また、「企業のCSR活動」という研究テーマの題材として、あるいは学生自ら身体を使い、農作業に携わる体験の機会として、それぞれの学習にうまく活かしていると思います。地域のラジオ番組で採り上げてもらったり、動画で記録を残す学生もいます。

3年目から「茅ヶ崎トラストチーム」(子育て中の母親を中心に結成された活動団体)の方々に参加され、学生の取り組みにもいろいろなふくらみが出てきました。イベントで子供たちと接する学生は、ふだん学校で見せない表情もみせてくれます。

また、堅いテーマは別にして、実際に田んぼを目の前にすると、その自然の美しさが若い感性に刺激を与えているようです。

白見 農作業というと若い人たちに敬遠されそうですが、人集めについては、特に何か工夫しているのですか。

岡野 私たちも試行錯誤しているところですが、山元さんに作っていただいたポスターは、イベントとしての楽しさが伝わったようで、参加人数が上向きになってきました。最近では「農ガール」とい



文教大学 岡野 雅雄氏



司会進行：(株)アルバック 白見 隆行



(株)アルバック 伊田 健助

うネーミングで、農作業のファッション性が注目されるなど、日常から離れて土に直接触れる新鮮な体験が求められているのを感じます。

農業をなりわいとする生活の「きつい」現実

伊田 かつて農業というと、作物で生計を立てる厳しさもあって「つらい、苦しい」ものと捉えられていましたが、まずは気軽に経験することで、そこに楽しさや喜びがあることを知ってほしいですね。

野中 確かにその通りなのですが、一方で農業をなりわいとして生活している人々にとっては、今もなお間違いなく「きつい」現実があります。学生さんたちには、楽しさと同時に農業で生活する厳しさをどう伝え、解決していくかという点にも目を向けてもらえればと思います。

私自身は現在、「田んぼプロジェクト」を思う存分楽しませていただいておりますが、年老いた後にこの場所はどうなるのか？そういう先のビジョンは見えてきません。高齢化が進んでいく中で、行政や農協さんもさまざまな手を打とうとしていますが、その辺りはなかなか見え

てこないですね。

平山 そうした現実に対し、国の方でも施策を打ち出しているところですが、茅ヶ崎市は規模が小さく、地方の一大農業地帯とはまた異なる解決方法が必要なのだと思います。茅ヶ崎市では先ほど述べました「農用地利用集積」を通じて、規模や販路を拡大したい積極的な農家に対し、その頑張りを支援する取り組みを着実に進めていきます。

これからのアルバックに期待すること

白見 最後に、この田んぼプロジェクトに対するご要望や期待などをお聞かせください。

野中 アルバックさんも生産活動の中で多くの水を使っていると思いますが、農業においても用水は常に大きな問題で、また「治水治国」という言葉もある

ように、国にとっても水をどう治めるかが重要です。ぜひ今後、水をテーマにした取り組みをお願いしたいですね。

伊田 当社の事業は、確かに非常に多くの水を使用します。野中さんの農作業におけるご苦勞をうかがい、あらためて水の大切さを痛感しました。当社の事業の中でも水を大切に利用していきたいと思えます。

岡野 アルバックさんのCSR活動は、プロジェクトを実行していく運営体制が素晴らしく、学生たちから見て学ぶところが大きいと思います。引き続き「田んぼプロジェクト」はもちろん、他のテーマも積極的に推進していただきたいです。

平山 アルバックさんにはこれまでも市政に多大なご協力をいただき、深く感謝しております。農業を取り巻く環境については、全国的に高齢化、後継者不足が進んでおり、茅ヶ崎市においても今後、担い手不足となってしまうことが予想されます。そのような中、市内でも農業参入する法人の動きがあります。貴社においても、農業参入という事業展開があれば、大いに支援させていただきたいと思えます。

山元 社内的にはCSR活動に対してもっと幅広く、積極的な関心と協力が得られたらと思います。きっと、より優れた意見やアイデアが出てくるはずです。そして夢は、アルバックの「真空」技術を活かしたCSR活動を拡げることです。

白見 そんな日が早く来るとよいですね。皆様、本日はどうもありがとうございました。



茅ヶ崎市 平山 源太氏



(株)アルバック 山元 美穂



野中 和幸氏

アルバックグループの環境パフォーマンス

アルバックグループは、国内外のグループ会社で事業活動を展開しています。各社では、省エネルギー、省資源について積極的な活動を行い効率のよいエネルギー使用、資源の利用を行っています。エネルギーの効率的な使用については今後も厳しく要求されることから、アルバックグループでも無駄のないエネルギー使用をめざしていきます。

2013年度のアルバックグループの環境活動

アルバックグループは構造改革によるコストダウンに併せて各社にて省エネルギー活動を推進してきました。本年度は売り上げの増加に伴い、エネルギーの使用量(電力)も前年と比較すると約0.7%の増加となりました。売り上げの増加と比較するとエネルギー使用量(電力)の増加率は低く抑えることができ、結果として、グループ全体で取り組む省エネ活動の成果を見ることができました。

各社の省エネルギー、省資源活動紹介

- 工場排水を回収・再利用し市水の使用量を約34%削減(アルバック成膜株)
- 事務所/現場の不要な空調・照明のスイッチをOFFにする(グループ各社)

2013年度はCO₂の排出量が増加しました。これは、エネルギー使用量の上昇に加え、当社の計算の基準としている東京電力のCO₂排出係数が上昇した事による影響であると考えられます。

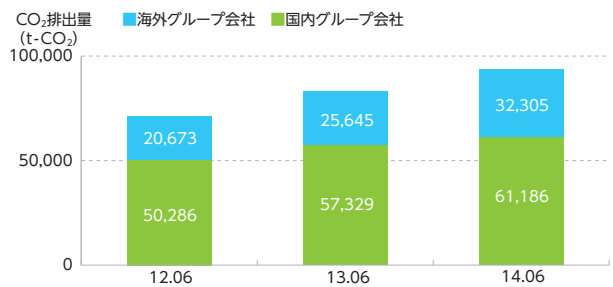
一方、廃棄物総量は前年度と比較し約9%の削減となりました。廃棄物の埋め立て率を下げる活動はアルバックグループの基準(3%以下)に対し4.9%でした。これは、一部の海外グループ会社にて埋め立て率が高い会社がある事に起因しています。本年度は埋め立て率が高い会社は埋め立て率の削減を行う事を目標に活動を進めていきます。また、埋め立て率が低い会社については、引き続き、廃棄物を有価物に転換し、廃棄物総量の削減に取り組んでいます。今後は、より環境に負荷が低い処理方法への転換を有価物化と組み合わせながら進めていく予定です。

アルバックグループでは事業活動から起因する環境負荷を下げる為、全社を挙げて今後も引き続き環境管理活動を進めていきます。

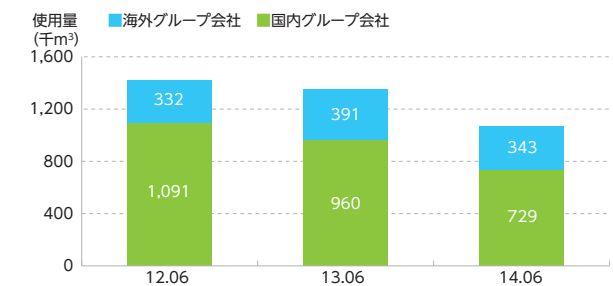
マテリアルバランス (アルバックグループ)

INPUT	
電気使用量 157,808 千kWh	燃料使用量
ガス使用量	●A重油 371 kL
●LPG 188 t	●灯油 32 kL
●LNG 616 t	●軽油 121 kL
●都市ガス 1,651 千m ³	水使用量 1,071 千m ³
	梱包材 925 t

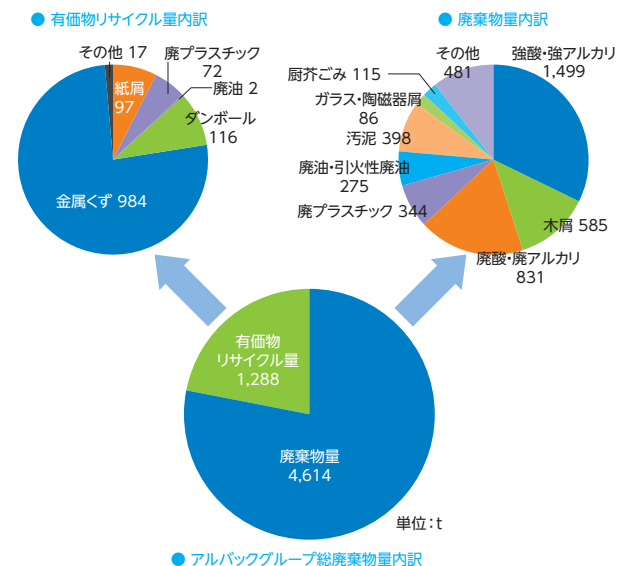
CO₂排出量推移



水使用量推移



廃棄物量推移



OUTPUT	
CO₂排出量	93,491 t-CO ₂ 電気・ガス・燃料の使用により発生
●廃棄物総排出量	5,902 t
●有価物リサイクル量	1,288 t
●輸送に関わるCO ₂ 排出量	2,025 t
●最終処分率	4.9%

※本データは主要な国内外41社のデータをもとに作成しています。
 ※梱包材の使用量は国内外26社のデータをもとに作成しています(前年度比1社増加)。
 ※輸送に関わるCO₂排出量は国内4社のデータをもとに作成しています。



組織

Organization

価値創造型ビジネスモデルの再構築のため、自らが変わり会社を変える必要があります。新生アルバックを支える人材が最大限に力量を発揮するための仕組みをつくります。

努力と成果に報いる 人事制度により 個人と組織の活性化へ

アルバックは事業構造改革の一環として従来の人事制度を大幅に変更しました。社員が利益志向を共有し、全員がベクトルを合わせていけるよう、報酬体系と評価制度を見直しています。

働きがいのある組織を目指す

～個人と組織の活性化～

事業構造改革をきっかけとして、「頑張った人が報われる人事制度」への方向転換を図りました。合理的な人事制度と評価制度のもと、権限移譲を積極的に行い、社員一人一人が情熱や向上心をもって自主的に各自の責任を全うできる環境を整え、個人と組織の活性化を実現します。

評価制度においては、結果のみを重視するのではなく、「困難な課題に積極果敢にチャレンジすること」や「チームで仕事を進めること」がより高く評価される制度運用を行ない、開発型企业として失ってはならない柔軟な発想や自由闊達な企業風土は今まで通り大切にしていきたいと考えています。

人事制度改革と並行して、教育の機会を増やすことに注力しています。全ての社員が能力開発に自発的に取り組めるよう様々なプログラムを提供し、個人の成長を促すとともに、ターゲットを絞り込んだ教育についても積極的に進めていきます。

また、次世代育成・ローテーション制度の推進も組織活性化には欠かせない課題と認識しています。スペシャリストとゼネラリストのバランスに配慮しつつ、国内外グループ会社を含め、多様性を意識した積極的な人材交流を行い、柔軟な組織運営に取り組んでいきます。

人材育成基本方針（2012年度改訂）

1. 個人を尊重し互いに信頼し、責任を全うする人材
2. 本質を見極め、情熱と執念で革新的技術・企画を創出する人材
3. 向上心に富み、目的達成に向けて自主的に行動する人材
4. グローバルな視点を持ち、世界を切り拓くリーダーを目指す人材

小日向社長と社員との懇談会

2013年11月から小日向社長と社員との懇談会を行っています。

参加者の方も率直に発言され、小日向社長のお人柄も手伝って、和気あいあいとした雰囲気での懇談会となっています。

開催の目的は、①社長と社員との直接対話、②社長から経営理念、会社の将来像、期待することを直接語りかける、③参加者からの提言・意見を吸い上げ、質問・疑問のその場での解決、④参加者同士の親睦または人脈形成、としています。社長は参加者の方からの意見を経営に活かす、そして参加者は社長との対話を何らか

の形で職務に活かせるようなお互いが満足を得られる関係を目標にしています。

場所は茅ヶ崎・本社工場内の応接室で行っています。毎回15名前後が参加しています。現在は茅ヶ崎地区の一般職・管理職を中心に行っていますが、茅ヶ崎以外の地区においても実施していく予定です。



小日向社長と社員

社内セミナー

2013年1月から全管理職を対象に、外部の講師をお招きして社内での研修を実施致しました。研修の内容はバランススコアカード(BSC)の手法を活用し、現在、自身がかかえる課題を洗い出し、それが財務・顧客・業務・人材育成の4つの視点から考えられてい

るかを考えていくものです。会社休日の土曜日1日を使い、1回30人前後の受講者を集めて行いました。これに続く研修は現在検討しておりますが、継続して実施していく予定です。

新任資格者研修

新任主事補を対象にプロジェクトマネジメントの手法を学ぶ研修を実施しています。プロジェクト期間は1年で完了できるテーマを研修当日に各グループが自由に設定しています。

今まで自由にテーマを設定していたのを、昨年度よ

り当社の業務に関連するもの、当社の業績に貢献できるものとし、対象者一人ひとりからアンケートを取り、テーマ設定をして実施致しました。当社の技術力を生かした新規事業や業績に貢献する施策など新任主事補の意識を向上させる研修となりました。

海外インターンシップ

アルバックでは海外の大学生をインターンシップ生として受け入れています。代表として、2名のインターンシップ生へのインタビューを紹介します。

■ What is it that you were impressed in Japan?

Alexander : I am impressed by many things in Japan. First, the fact that almost every train and bus in Japan arrives and leaves exactly on time is amazing. This is a luxury that I wish I had in Canada. Second, the fact that Japanese cities and rural areas are both so incredibly clean! Even though I can never find a garbage bin on the street, rarely do I ever see any trash on the ground! Finally, the fact that there is such a low crime rate and you can (more often than not) actually trust people not to steal your belongings.

■ What was the thing you had the most trouble with since coming to Japan?

Akhilesh : The language barrier and the cultural differences. Being late in India isn't a big deal, but being 5 minutes before the scheduled time is everything in Japan!

■ What do you think of ULVAC people?

Alexander : Everyone I have met in ULVAC has been so incredibly nice, polite, and friendly to me. It reminds me of Canada. I'm very lucky that most people here have a good sense of humour and are willing to joke around with me too. I'm very thankful to everyone for sharing their stories with me and including me in their conversations on a daily basis even though I can only speak a little bit of Japanese.

■ What do you think of ULVAC as a company?

Akhilesh : I'm impressed by the work ethic and the work environment at ULVAC. I've interned abroad before and also in India, but I had never seen such commitment and the will to go the extra mile anywhere!

■ How do you want to make use of what you have learned in a company in the future?

Alexander : Since my major in university is Business Administration and Marketing, my experience at ULVAC has been quite productive. Even though I am stationed in the General Affairs Department, I have had the opportunity to learn about many different aspects of business, especially from the marketing and communications departments. In particular, I will make use of the interesting research, sales, and marketing techniques. I believe that all of these experiences will enhance my ability to perform once I begin my career in marketing.

Akhilesh : I've learnt a lot since the beginning of my internship, and learning more about 2D AutoCAD and 3D CAD will definitely help me a lot in the future. Also, I hope to continue following the work ethic that I'm getting used to here in Japan.



左 : Alexander Pease (出身 : カナダ、研修先 : 総務部)
右 : Akhilesh Gannavarapu (出身 : インド、研修先 : 産業機器事業部)

CSR社員意識調査結果を受けて

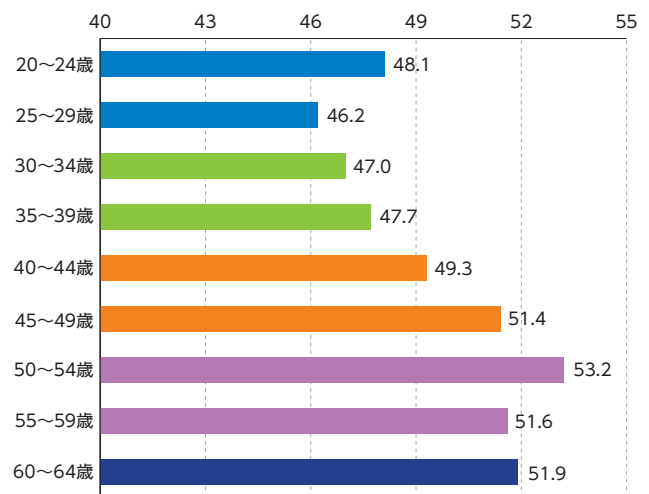
アルバックで勤める皆様のCSRに関する認識度・意識を調査するため、「アルバック CSR社員意識調査」を2月24日～3月14日に実施しました。

2012年度よりWEBを使ってアンケートを実施し、回答数は1,344人中823人(回答率61.2%) について調査結果をアルバック独自の計算式でUPIX(ULVAC Precious Index and Average) を算出し、評価しました。UPIXは50を平均的な値とし、UPIXが高いほど、CSR意識・技術・環境・組織の領域で高い評価だったことを意味します。

年齢別のUPIXでは、年代が高まるにつれて評価が高まっている傾向があります。(図参照)。今後の会社を支える若手から中堅社員の声を汲み取りながら、CSR活動や職場づくりを進めていく必要があると言えます。具体的には、過去3年のWEB回答結果を、関連部署にフィードバックしアルバックの成長フェーズへ向け、より明確な設問項目を作成していきます。

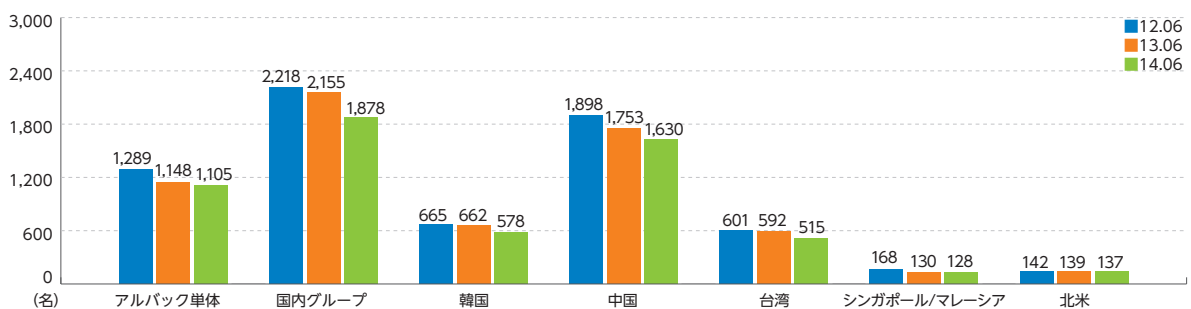
今後もこの調査を継続し実施し社員の皆様の多くのご意見をとりいれつつ、働きやすさ・働きがいのある職場づくりを通し、アルバックのCSR活動を推進してきます。

○ 図 年齢別UPIX

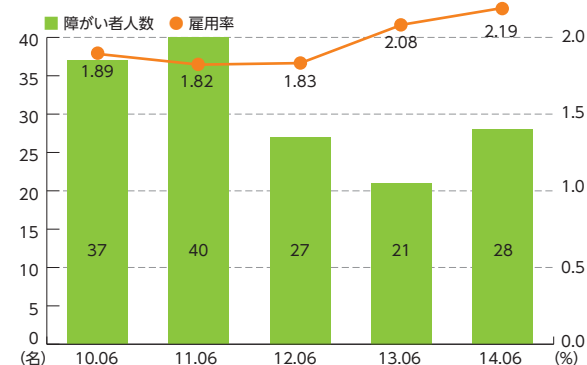


アルバックグループの人事データ

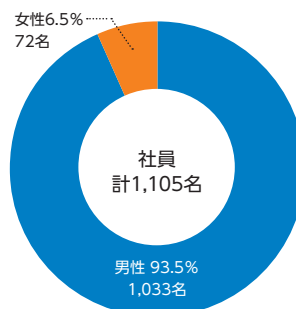
○ アルバックグループ社員数



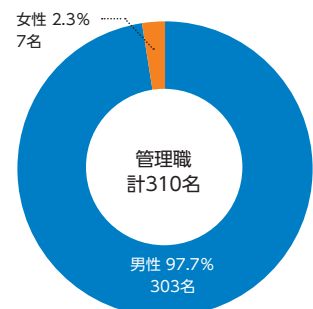
○ 障がい者雇用率の推移 (アルバック単体)



○ 社員男女比率 [14.06] (アルバック単体)



○ 管理職男女比率 [14.06] (アルバック単体)



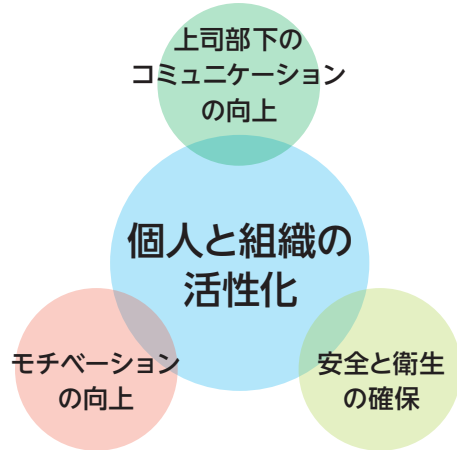
ものづくりを支える健康づくり

健康推進室では、アルバックの“ものづくり”を“健康づくり”で支えています。社員が生産性の高い状態で働くことができるよう、『個人と組織の活性化』を健康推進室のビジョンに定めています。ビジョンを実現するため、『上司部下のコミュニケーションの向上』『モチベーションの向上』『安全と衛生の確保』という3つの目標を掲げ、日々活動しています(図1)。その中で、もっとも力を注いでいる活動は、メンタルヘルス教育です。社内規程の「心の健康づくり細則」にもとづき、セルフケア教育とラインケア教育を展開しています(表1)。

セルフケア教育は、『上司部下のコミュニケーションの向上』を目的とし、保健師が主体となって、全社員を対象に実施しています。良好なコミュニケーションの要素である“傾聴”や“アサーション”、考え方のクセに焦点をあてた“認知”の3つのテーマでは、グループワークを中心とした少人数制・参加型の研修スタイルをとっており、受講者からは楽しみながら学べると好評を得ています。

ラインケア教育は、『安全と衛生の確保』『モチベーションの向上』を目的とし、全管理職を対象に実施しています。①安全配慮義務を履行するための“メン

○ 図1. 健康推進室のビジョンと目標



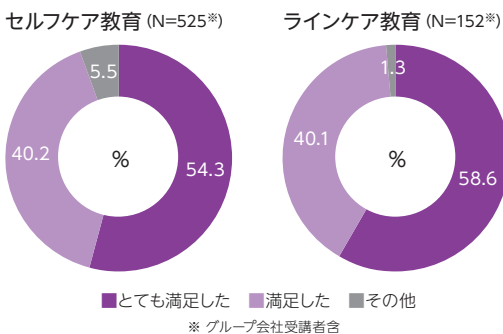
○ 表1. メンタルヘルス教育体系

	セルフケア教育	ラインケア教育
目的	上司部下のコミュニケーションの向上	安全と衛生の確保 モチベーションの向上
講師	保健師	産業医
対象	全社員	全管理職
内容	傾聴 認知 アサーション	安全配慮義務履行 ケースマネジメントの勘所 モチベーションマネジメントの基礎

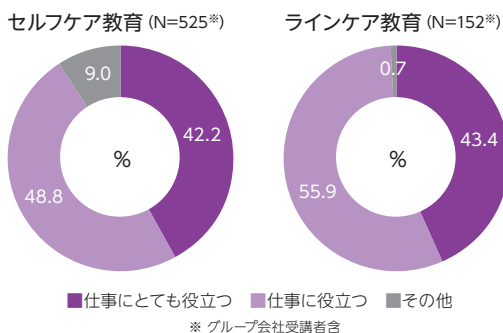
タル不調者への適切な対処法”②部下のモチベーション向上は管理職の職務の一つとして“モチベーションマネジメントの基礎”の2つのテーマで産業医がレクチャーしています。

受講者アンケートの結果によると、本教育は広く受け入れられており、(図2,3)半数近くの人から5段階評価で最高点をいただき、「出来る限り大人数に受けてもらい、会社全体で意識改革となるといい」「この教育を全ての管理職に徹底することで、会社全体のいきいき感が高まると思う」といった好評の声もいただいています。今後も活動を推進し、『個人と組織の活性化』に貢献していきます。

○ 図2. 受講者アンケート_満足度



○ 図3. 受講者アンケート_仕事に役立つ



教育風景

労働安全衛生

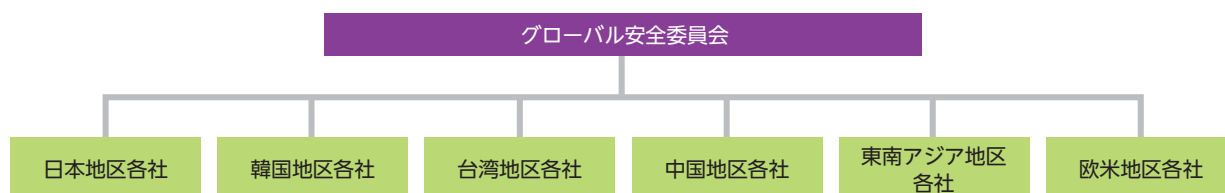
アルバックグループは、「安全第一」を企業経営の基本理念とし、お客様に利用して頂く様々な製品やサービスの安全と、私たち自身が明るく元気に働くことのできる活気ある職場づくりを、リスクアセスメントを中心とした安全管理システム (OSHMS) の運用によって目指していきます。

1. アルバックの安全衛生活動 —お客様と社員の安全と健康の実現に向けて—

アルバックグループは、お客様と社員の安全と健康の実現のために、グローバル安全委員会を定期的で開催し、その中で、グループ各社の代表によるグループ全体の方針の決定と水平展開を図り、グループ全社が一体となって安全衛生活動を推進しています。各社においては、OSHMSを運用し、社長ま

たは安全担当役員による会社全体のマネジメントレビュー、社員一人一人によるリスクアセスメント等を通じて、経営トップ層から現場作業者に至るまで、全社を挙げて安全衛生活動に取り組んでいます。このような活動の積み重ねにより、アルバックグループの労働災害は年々減少しつつあります。

○ アルバックグループ安全管理体制



ULVAC CRYOGENICS KOREA INCORPORATED : 指差唱和



ULVAC TAIWAN INC. : 指差唱和



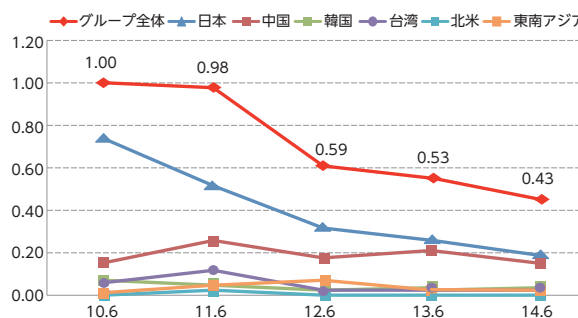
ULVAC KOREA, Ltd. : 安全保健教育

2. 労働災害ゼロを目指して

アルバックグループの労働災害は2009年度より年々減少し、2013年度は2009年度比で43%まで減少しています。このように、アルバックグループ全体の安全環境は年々レベルアップが図られていますが、気を抜くことなく、基本に立ち返って、昨年度よりグループを挙げて5S(整理・整頓・清掃・清潔・躰)活動の推進を行っています。5S活動を通じて、僅かなリスクさえも見逃すことなく発見し、これを直ちに是正して、全社員の理想的な安全と健康の実現を目指しています。

○ アルバックグループ労働災害発生率の推移

このグラフは、各年度における労働災害発生件数の割合を、2009年度 (10年6月時点) を1.00として表したものです。2013年度 (14年6月時点) の労働災害発生率は、2009年度に比べて57%減少しました。



3. 防火防災避難訓練

東日本大震災をはじめ、最近では中国雲南省で大地震が発生する等したことから、世界各地で地域防災の重要性が見直されています。アルバックグループ各社においては、安全確保の仕方、避難方法、初期消火の方法等の基本的な訓練だけでなく、各社の立

地、環境に合わせて、それぞれ工夫を凝らした防災訓練を行っています。また、茅ヶ崎工場においては、市と協定を結んで、会社構内を近隣住民のための避難場所として提供する等、地域の防災にも貢献しています。



愛発科 (中国) 投資有限公司：消火器訓練



アルバック・ファイ(株)：近隣工場との合同訓練



タイゴールド(株)：化学物質漏洩対策訓練 (スピドドリル)



ULVAC KOREA, Ltd.：消火栓訓練



アルバック成膜(株)：空気呼吸器装着訓練



アルバック九州(株)：救急救命訓練

4. 交通安全活動

近年では世界的に飲酒運転が厳罰化される等、交通安全に対する意識も高まっています。アルバックグループでは、各社にて車両の使用頻度や使われ方に応じて、地元警察署や交通安全協会の皆様のご

協力を頂いて、各地域の交通事情に合わせた交通安全セミナーを開催する等の活動を行っています。これにより、社員が正しい交通ルールを学び、交通ルールの遵守と交通マナーの実践に努めています。



ULVAC TAIWAN INC.：二輪のブレーキ検査



アルバック機工(株)：交通安全啓蒙活動

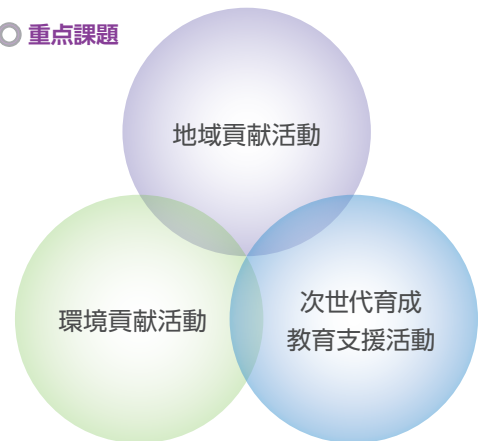


(株)アルバック：警察署員による交通安全教育

地域社会(グローバルな企業市民活動)

アルバックグループは、従来から世界各国でさまざまな社会貢献活動を行ってきましたが、近年、企業の社会貢献の重要性が高まっていることをふまえて、2013年に社会貢献活動基本方針と重点課題を策定しました。これをもとに、さまざまな社会的な課題の解決に向けてアルバックグループが保有する技術や人材を有効活用し、社会貢献活動を推進することで、地域社会およびグローバル社会に貢献していきます。

○ 重点課題



社会貢献活動基本方針

「独創的な先端技術を持って産業と科学の発展に貢献する」という経営理念のもと、独創的な技術を世界中に提供するとともに、アルバックグループが保有する技術や人材を活かし、社会のさまざまな課題を解決するための活動を行っていきます。

アルバックグループ社会貢献活動実績(2013年度)

次世代育成・教育支援活動	2件
地域貢献活動	26件
環境貢献活動	25件
合計	53件



ファミリー工場見学



ビーチクリーン



地元小学校の工場見学

活動事例

韓国アルバックグループ

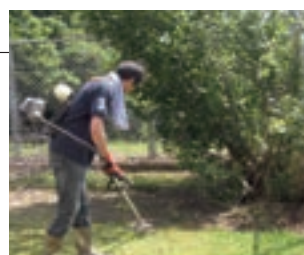
韓国アルバックグループでは、さまざまな社会貢献活動を実施しています。

特に協星会奉仕団SEPAS では、2013年12月に「愛のキムチ分かち合い」活動として、京畿道 安城市の一人暮らしのお年寄りや身寄りのない子どものために600株のキムチ漬けを作りました。



アルバック九州株式会社

2014年5月、アルバック九州株式会社をはじめとするアルバック鹿児島工業団地では、「アルバックボランティアデー」を開催しました。特別養護老人ホーム 横川緑風園の施設内の窓拭き、空調フィルター清掃、除草と剪定を行い、入居者と親睦を図りました。



コーポレート・ガバナンス

コーポレート・ガバナンスは、社会並びに株主の皆様に対する企業責任遂行のための最重要経営課題の一つと認識しております。企業経営における公正中立性、透明性の確保と同時に、迅速かつ効率的な業務執行の実現を重視しております。そこで、2012年7月1日より執行役員制度を導入し、経営の意思決定及び業務監督機能と業務執行機能の分離を図りました。

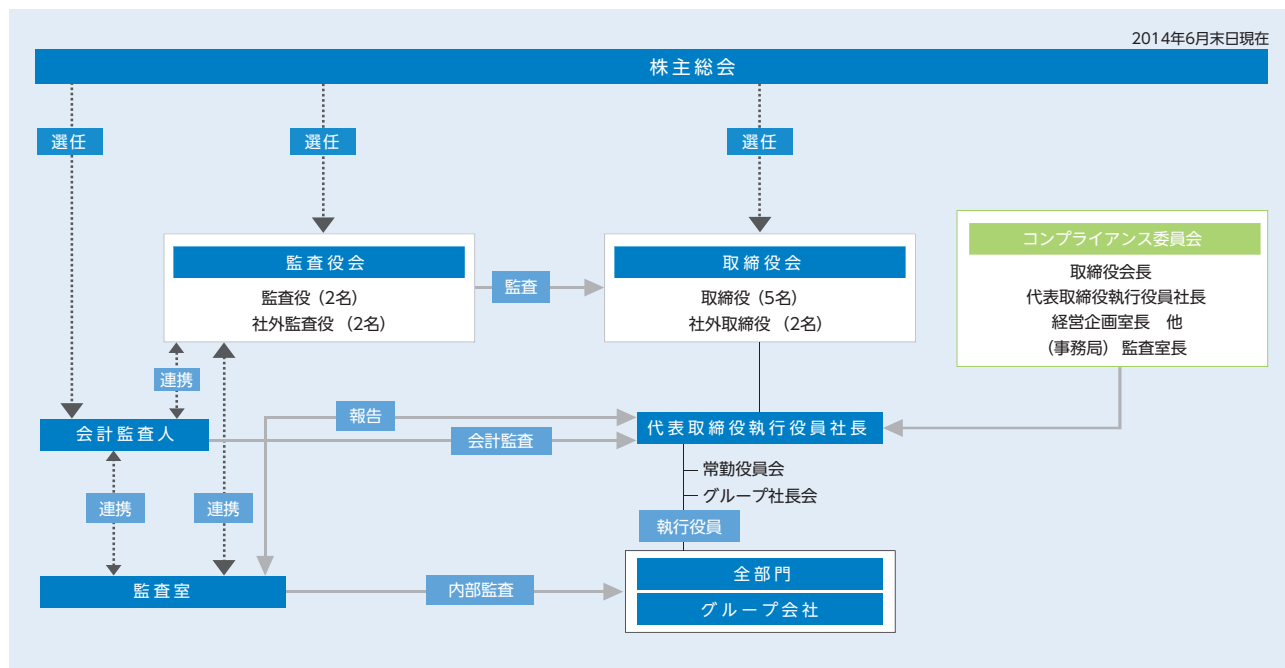
アルバックの経営管理体制

アルバックは、経営上特に重要な事項についての合議機関として、取締役会を設置し、毎月1回の頻度で定時開催を行うとともに、機動性確保の観点から必要に応じて臨時開催もしております。この取締役会は7名から構成されており、うち2名を社外取締役としています。また監査、監督の充実という観点から、経営判断及び業務執行の監督機関として監査役会を設置しております。この監査役会は、4名から構成されており、うち2名を社外監査役としています。

業務執行体制

アルバックは、取締役会における判断を補完しつつ迅速かつ効率的な業務執行の実現を目的とする機関として常勤役員会を設置し、毎月2回の頻度で定時開催を行うとともに、機動性確保の観点から必要に応じて臨時開催も開催しております。この常勤役員会は常勤取締役及び執行役員の計14名より構成されております。

■ 経営管理体制



コンプライアンス

アルバックグループは、より徹底した法令遵守体制を推進するため「コンプライアンス規程」及びその関連諸規定を定めて体系化しています。この規定体系に従って、コンプライアンス委員会の運営や内部通報制度の運用といった体制が整備され、法令遵守の精神を社内に定着させるよう継続的に活動しています。

企業倫理行動基準の制定

アルバックは、18項目からなる社員一人ひとりの行動規範を示した「企業倫理行動基準」を制定し、内容説明を行った上で、小冊子化したものを配布してい

ます。社員一人ひとりが、これを企業人としての法令遵守精神の証とできるようにしています。

内部通報制度による法令遵守

アルバックは、法令違反などによって生じる影響を最小限に留めるため、内部通報制度を整備しています。内部通報制度の窓口は、コンプライアンスの社内調査機関であるコンプライアンス委員会の事務局を務める監査室が担当しています。この内部通報制度を利用しやすくすることを目的として、同室の活動の独立性を確保するとともに、匿名による通報も認めています。さらに、この社内調査の公正性を担保

違反行為への対応

コンプライアンス委員会で調査案件について審議した結果、法令や社内規則への違背事実が認められた場合、速やかに該当違背行為の中止措置を実行します。そして、違背行為に関連した者についての処分を指示するとともに、特に重大な違背行為に対して

しつつ、慎重な審議を行うために、コンプライアンス委員会の構成員を会長、社長と各組織の長とし、厳格な守秘義務を自ら課した上で、通報者や調査関係者に対して不利益な取り扱いがなされないような運用をしています。この観点から、社内調査は、慎重に行われており、社内外を問わず多くのヒアリングを行うとともに、特に専門性が要される事案では、弁護士などが同席して行うものとしています。

は、懲戒委員会の審議を経てしかるべき処分を決定します。さらに、違背行為が起きた根源的な原因まで検討を行い、より実効的な再発防止策を講じるよう努めています。

リスクマネジメント

アルバックグループは、複雑多様化するリスク要因に対して、識別・分類・分析・評価を通じて適切かつ迅速な対応がとれる体制を拡充しています。このリスクマネジメント体制を戦略的経営と有機的に結びつけることで、より一層の企業価値向上を図っています。

リスクマネジメント体制構築への取り組み

グループ共通規定によるリスク対応体制の強化

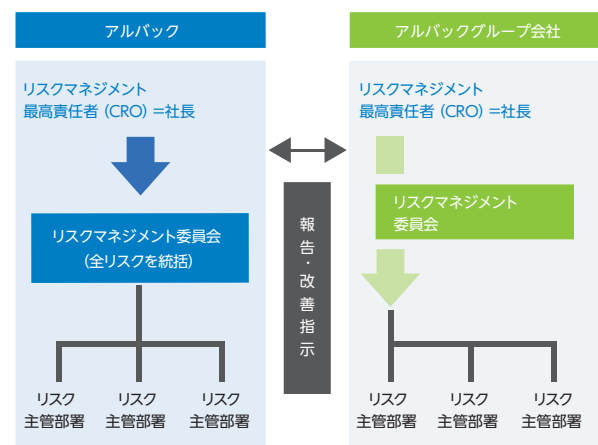
アルバックグループは、リスクマネジメント体制の拡充を重要経営課題と認識しています。そこで、アルバックグループ共通規定として「アルバックグループ・リスクマネジメント規程」を制定し、グループ各社

アルバックのリスクマネジメント体制

アルバックは、広範なリスクを分類し、それぞれのリスクに対して主管部署を設置しています。この主管部署は、インフォメーションセンターとして、関係部署を取りまとめて具体的なリスクの洗い出しを行い、評価をしています。そして、情報を恒常的に収集して適切にリスク対応するとともに、問題点の察知も行っています。特にこの評価作業において重要と判断されたリスク情報については、円滑な情報の収集ができるように継続的活動を行い、緊急時には迅速に対応できるように特に配慮しています。その上で、このリスクマネジメント体制の検証の観点から、社長が委員長となり、リスク主管部署によって構成されているリスクマネジメント委員会をリスクマネジメント統括組織として年2回定時開催し、全社的な基本方針の決定や管理運営状況の把握と改善に取り組んでいます。

の社長がそれぞれ最高責任者の任に就き、さまざまなリスクに関する情報を関係部署と共有しています。さらに、重要事項については、グループ各社の社長からアルバックの社長にまで速やかに情報が伝わる体制にしています。

■ リスクマネジメント体制



- ・リスクごとに主管部署を設定し、PDCAによるリスクマネジメントを行っています。
- ・グループ会社においては、各社の規模等を勘案して、リスクマネジメント委員会の設置の要否を判断しています。

役員一覧 Board of Directors and Auditors

■ 取締役



小日向 久治

代表取締役執行役員社長



坊 昭範

取締役専務執行役員



本吉 光

取締役常務執行役員



末代 政輔

取締役常務執行役員



小田木 秀幸

取締役執行役員



御林 彰

取締役 (社外)



池田 修三

取締役 (社外)

■ 監査役



待鳥 啓信

監査役



高橋 誠一

監査役

■ 執行役員



中村 静雄
常務執行役員



岩下 節生
常務執行役員



平野 裕之
執行役員



中村 孝男
執行役員



齋藤 一也
執行役員



白 忠烈
執行役員



梅田 彰
執行役員



松本 亮
執行役員



浅田 千秋
監査役 (社外)



大塚 一実
監査役 (社外)

財務ハイライト

単位：百万円（1株当たり金額を除く）

会計年度	2010年6月	2011年6月	2012年6月	2013年6月	2014年6月
受注高	221,705	235,932	152,221	166,778	169,808
売上高	221,804	232,040	196,804	163,351	173,878
営業利益(損失)	4,809	1,850	(6,384)	6,115	11,996
税金等調整前当期純利益(損失)	4,558	(9,192)	(33,704)	(565)	15,137
当期純利益(損失)	2,138	(8,706)	(49,984)	(3,807)	11,538
設備投資額	11,087	17,827	12,719	6,761	6,217
減価償却費	11,949	10,717	9,096	7,967	7,421
研究開発費	8,005	8,255	7,088	4,989	5,213

会計年度末					
総資産	313,784	313,616	249,651	243,289	230,791
純資産	102,504	92,023	41,187	59,436	72,238
社員数(人)	7,169	7,878	6,981	6,579	5,971

単位：円

1株当たり情報					
純資産	1,992.06	1,787.51	751.00	806.38	1,040.23
当期純利益(損失)	46.60	(176.43)	(1,012.94)	(87.79)	223.18
潜在株式調整後当期純利益	42.65	—	—	—	165.6
配当金	21.00	—	—	—	—

単位：%

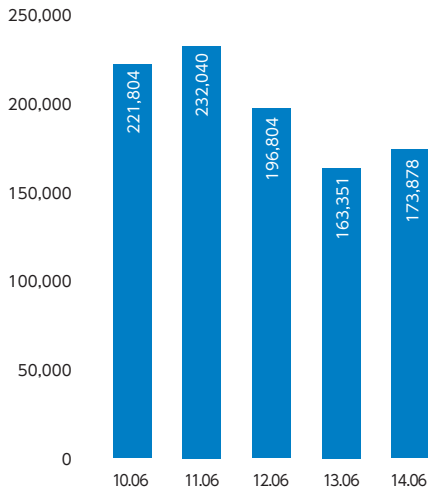
その他情報					
総資産当期純利益率(ROA)	0.7	—	—	—	4.9
自己資本当期純利益率(ROE)	2.3	—	—	—	18.8
自己資本比率	31.3	28.1	14.8	22.7	29.2

将来の見通しに関する記述についての注意事項

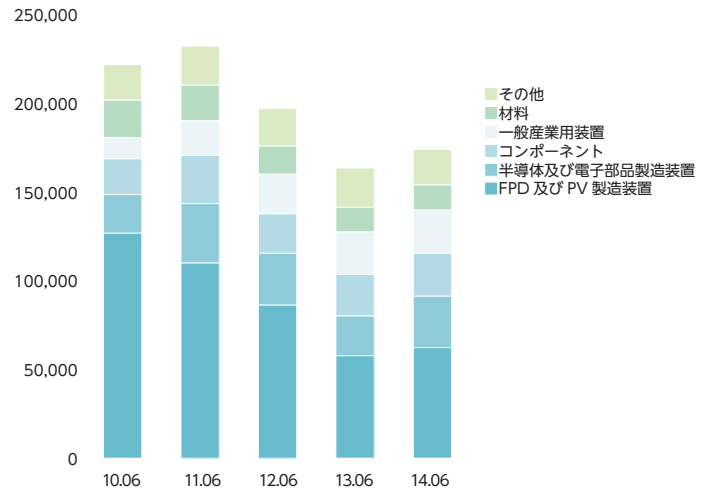
このレポートで述べられている将来の当社に関する見通しは、現時点で知りうる情報をもとに作成されたものです。当社グループのお客様であるフラットパネルディスプレイ(FPD)・半導体・太陽電池・電子部品などの業界は技術革新のスピードが大変速く、競争の激しい業界です。

また、世界経済、為替レートの変動、FPD・半導体・電子部品・原材料などの市況、設備投資の動向など、当社グループの業績に直接的・間接的に影響を与える様々な外部要因があります。したがって、実際の売上高及び利益は、このレポートに記載されている予想数値とは大きく異なる可能性があることをご承知おきください。

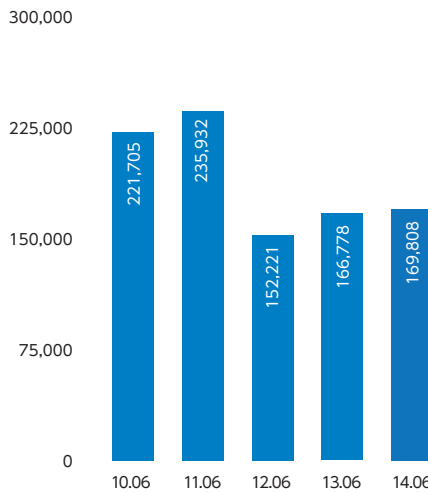
■ 売上高 (単位：百万円)



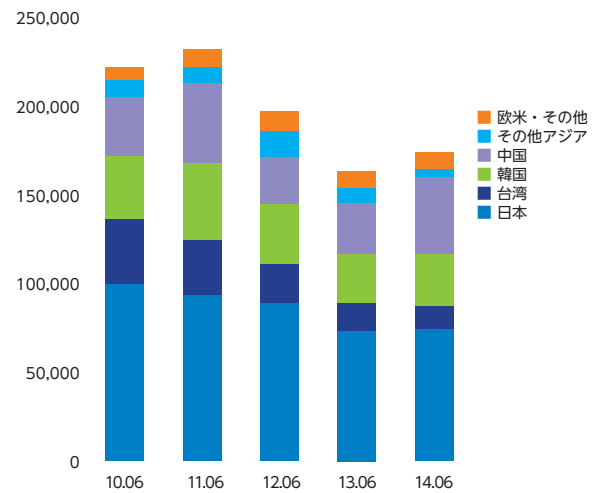
■ 事業別売上高 (単位：百万円)



■ 受注高 (単位：百万円)

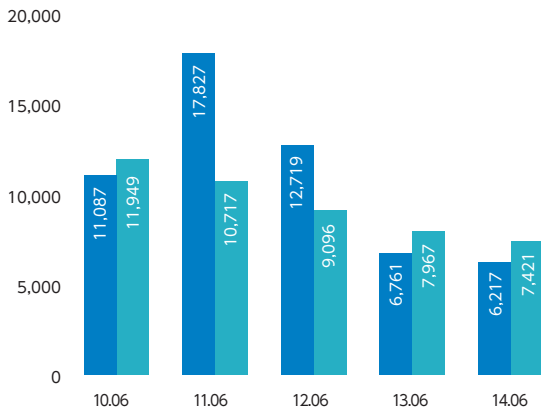


■ 地域別売上高 (単位：百万円)

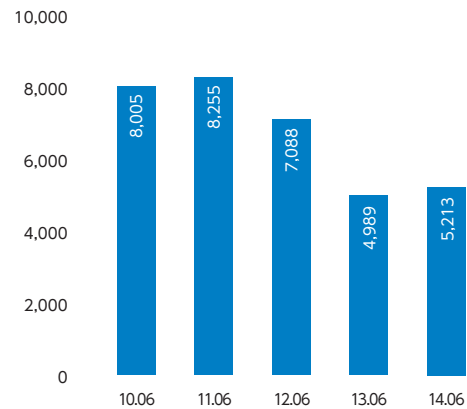


■ 設備投資額／減価償却費 (単位：百万円)

■ 設備投資額 ■ 減価償却費



■ 研究開発費 (単位：百万円)



営業の概況

□ 経営成績

当連結会計年度におけるわが国経済は、消費税引き上げに伴う駆け込み需要の反動が見られるものの、各種財政・金融政策の効果や円高の是正などを背景に企業収益や雇用情勢が改善するなど緩やかな回復を続けてまいりました。米国では、個人消費が堅調に推移するとともに設備投資や住宅着工にも持ち直しの動きが見られるなど民間需要を中心に緩やかな景気回復の動きが確かなものとなってまいりました。欧州では、失業率が依然として高水準にあるものの、低下の動きが見られるなど景気は持ち直しの動きが続きまして。中国では、個人消費が堅調に増加するなど景気は安定した成長が続いているもののその拡大のテンポは緩やかなものになってまいりました。

当社グループを取り巻く市場環境につきましては、期初にはテレビ市場の低迷により大型液晶ディスプレイ関連の設備投資に慎重な動きが見られたものの、後半には中国を中心に投資が再開されました。また、スマートフォン、タブレットPCなどのモバイル端末向け中小型液晶ディスプレイ関連の設備投資が堅調に推移いたしました。

半導体市場は、モバイル端末、サーバーなどの需要増加により、モバイルDRAM、NANDフラッシュメモリ向け設備投資が順調に推移いたしました。

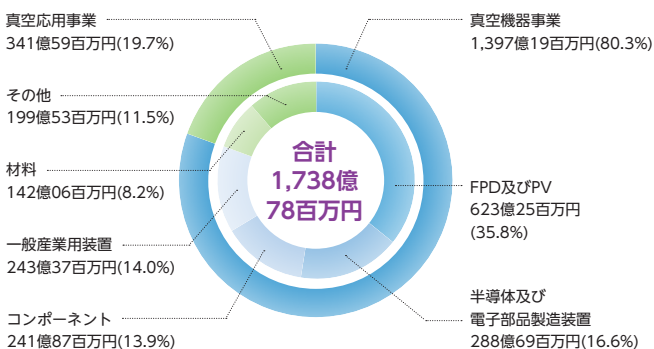
自動車市場では、エコカーなどの販売が好調なことから、カーエレクトロニクス製品をはじめ自動車部品向けの設備投資が堅調に推移いたしました。

また価格面では、お客様からの継続的な価格引き下げ圧力に加え、競合他社との厳しい価格競争が継続しました。

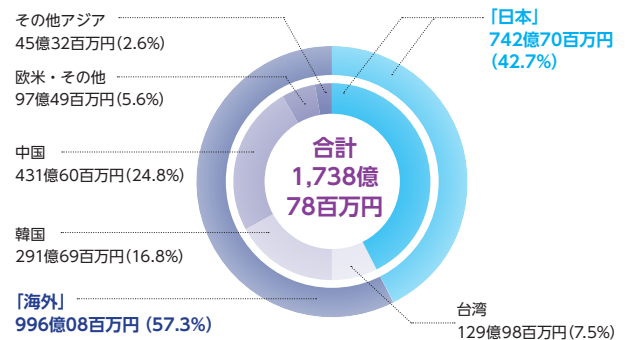
こうした中、当社グループは、昨年策定した中期経営計画を基本に事業展開を図ってまいりました。

その結果、当連結会計年度につきましては、受注高は、1,698億8百万円(前年同期比30億30百万円(1.8%)増)となり、売上高は1,738億78百万円(同105億27百万円(6.4%)増)となりました。また、損益面では、営業利益は119億96百万円(同58億80百万円(96.2%)増)、経常利益は133億84百万円(同71億19百万円(113.6%)増)、当期純利益は115億38百万円(前年同期は38億7百万円の当期純損失) となりました。

■ 事業別売上高



■ 地域別売上高



真空機器事業

真空機器事業を品目別に見ますと下記のとおりです。

■ FPD及びPV製造装置

FPD関連では、受注高は日本、韓国向けの中小型液晶ディスプレイ製造装置、台湾、中国向けの大型液晶ディスプレイ製造装置が寄与いたしましたが、前期に比べて減少いたしました。一方、売上高は日本、中国及び韓国向けに中小型液晶ディスプレイ製造装置が、中国向けに大型液晶ディスプレイ製造装置、有機EL製造装置が寄与し、前期に比べて増加いたしました。

■ 半導体及び電子部品製造装置

半導体関連では、モバイルDRAM、NANDフラッシュメモリ用スパッタリング装置や自然酸化膜除去装置、電子部品関連では、パワー半導体やモバイル端末向け高機能デバイス用スパッタリング装置などが寄与し、受注高、売上高ともに前期に比べて増加いたしました。

■ コンポーネント

コンポーネント関連では、受注高は下期に入り一服感が見られ、前期に比べて減少いたしました。売上高は半導体、電子部品、自動車関連の設備投資が堅調だったこともあり、前期に比べて増加いたしました。

■ 一般産業用装置

一般産業用装置関連では、主に自動車部品用真空熱処理炉、ヘリウムリークテスト装置、高性能磁石用真空熱処理炉、医薬品用凍結真空乾燥装置などが寄与し、受注高、売上高ともに前期に比べて増加いたしました。

真空応用事業

真空応用事業を品目別に見ますと下記のとおりです。

■ 材料

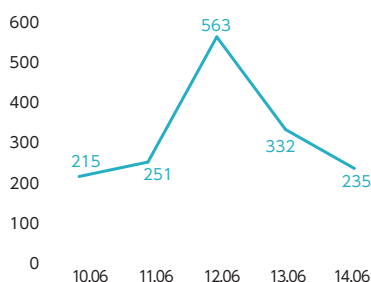
不採算事業の見直しなどにより受注高は前期に比べて減少いたしました。スパッタリングターゲット材料関連を中心に売上高は前期に比べて若干増加いたしました。

■ その他

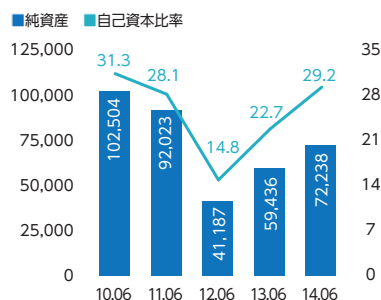
マスクブランクス関連では、スマートフォンやタブレットPCの好調を受け、堅調に推移いたしました。

分析機器関連では、日本の民間企業向けを中心に堅調に推移いたしました。

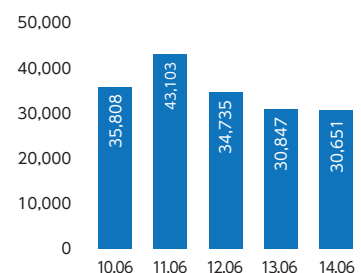
■ 負債比率 (%)



■ 純資産 (単位: 百万円) / 自己資本比率 (%)



■ 販売費及び一般管理費 (単位: 百万円)



□ 財政状態に関する分析

1 期末の資産、負債及び純資産の状況

●資産

124億99百万円減少となりました。主な内容は、受取手形及び売掛金が131億85百万円減少したこと、たな卸資産が95億75百万円減少したこと、一方で現金及び預金が130億67百万円増加したことなどです。

●負債

253億1百万円減少となりました。主な内容は、短期借入金が135億8百万円減少したこと、前受金が40億87百万円減少したこと、受注損失引当金が26億80百万円減少したこと、長期借入金が29億94百万円減少したことなどです。

●純資産

128億2百万円増加となりました。主な内容は、利益剰余金が114億76百万円増加したことなどです。

2 当期のキャッシュ・フローの状況

●営業活動によるキャッシュ・フロー

税金等調整前当期純利益、減価償却費、売上債権の減少、たな卸資産の減少、仕入債務の増加などのプラス要因に対し、前受金の減少、受注損失引当金の減少などのマイナス要因により、322億13百万円の収入となりました。

●投資活動によるキャッシュ・フロー

有形及び無形固定資産の取得による支出などにより、30億23百万円の支出となりました。

●財務活動によるキャッシュ・フロー

短期借入金の減少、長期借入金の減少などにより、168億81百万円の支出となりました。

以上により、現金及び現金同等物の期末残高は平成25年6月期末に比べ、128億8百万円増加し、570億12百万円となりました。

□ 事業等のリスク

1 FPD、太陽電池及び半導体の市場変動による影響

当社グループは、特にFPD、半導体及び電子部品などの製造工程で使われる真空装置の分野において、独自

技術の開発を行って市場投入することにより、同分野におけるシェアを獲得して成長してまいりました。今や、同分野の売上は、連結売上高の約5割を占めており、当社グループの主力分野となっております。その反面、当社グループの取引先であるFPDメーカー、半導体及び電子部品メーカーの設備投資の大幅な縮小が発生した場合や取引先である顧客の財務状況が悪化した場合には、当社グループの経営成績や財政状態に悪影響が及ぶ可能性があります。

2 研究開発による影響

当社グループは、積極的な研究開発投資を継続して行うことにより、最先端技術を使用した新製品を市場に投入し続けてきました。しかしながら、新技術を製品化する上では不可避の、想定計画との比較において開発が著しく困難な局面にぶつかったり、または開発の著しい遅延が余儀なくされるといった事象が発生した場合などに、当社グループの経営成績や財政状態に悪影響が及ぶ可能性があります。

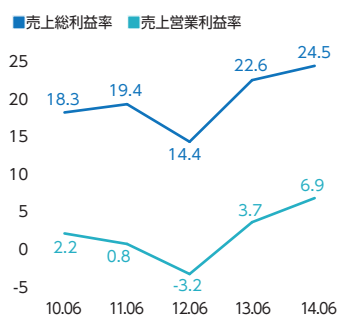
3 価格競争による影響

当社グループの主要取引先であるFPD業界においては、依然としてデジタル家電の需要が高いものの、当該取引先からの強い販売価格の引き下げ要求が恒常化していることに加え、韓国、台湾、中国の新規競合メーカーの台頭による一層の競争の激化や材料・購入品の価格高騰による原価上昇によって、当社グループの経営成績や財政状態に悪影響が及ぶ可能性があります。

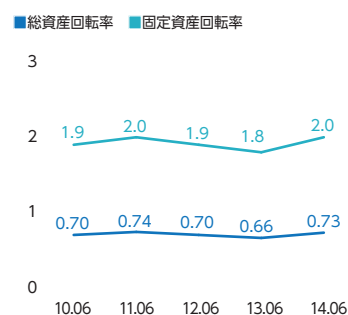
4 海外売上高増加による影響

当社グループの海外売上高比率は高く、特に韓国、台湾及び中国などの対アジア地域売上高比率が高率となっております。そこで、為替リスクを回避するため、原則として円建取引をしております。しかしながら、当該円建取引では、円高時において価格競争力の面で海外メーカーと比較して不利となることがあります。また、例外的に外貨建取引を行った場合においては、急激な為替変動による為替リスクが生じる可能性があります。これらの要因により、当社グループの経営成績や財政状態に悪影響が及ぶ可能性があります。

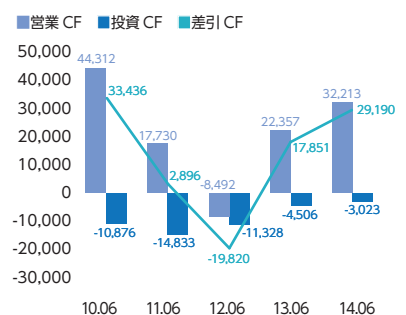
■ 売上総利益率/売上営業利益率 (%)



■ 総資産回転率/固定資産回転率 (回)



■ キャッシュ・フロー (単位: 百万円)



5 グローバル事業展開に関する影響

当社グループは、今後成長が期待される中国市場におけるシェア確保のため、積極的に同国に進出して現地法人による事業展開をしております。これらの現地法人においては、個々の経営を把握して適宜対応できる体制を構築しておりますが、予期しない法制度の変化による各種規制や税制・相場制度の変更、政情不安、景気変動、人材の流出などにより、当社グループの経営成績や財政状態に悪影響が及ぶ可能性があります。

6 品質に関する影響

当社グループは、ISO9001の認証取得を含む品質保証体制を確立し、高レベルのサービスを提供し続けてきました。しかしながら、常に先端技術を利用した製品を提供していることから、開発的要素も多く、予期せぬ不良が発生して対応を余儀無くされる場合も想定されます。このような場合、当社グループの経営成績や財政状態に悪影響が及ぶ可能性があります。

7 知的財産権に関する影響

当社グループは、各種真空装置に関する多数の特許を保有し、積極的に新規権利獲得にも努めています。同時に、当社グループの製品に関する第三者の特許調査も行っております。しかしながら、第三者から不測の特許侵害訴訟が提起された場合、当社グループの経営成績や財政状態に悪影響が及ぶ可能性があります。

8 資金調達に与える影響

当社グループの借入金にかかる金融機関との契約には、財務制限条項が付されているものがあります。当該財務制限条項に抵触した場合、当社グループの経営成績や財政状態に悪影響を及ぼす可能性があります。

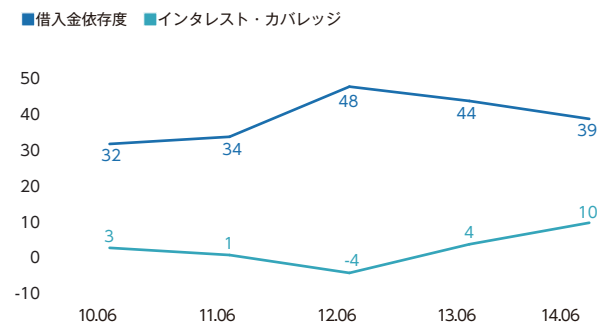
9 訴訟等に係るリスク

当社グループの営む事業に関連して、国内外の訴訟等の対象となるリスクが存在しており、重要な訴訟等が提起された場合には、当社グループの経営成績や財政状態に悪影響が及ぶ可能性があります。

10 その他リスク

当社グループと同様にグローバルな事業展開や広範な事業展開をしている企業と同じく、各国または各地域における経済環境、自然災害、戦争、テロ、感染症等の諸般の不可抗力要因が、当社グループの経営成績と財政状態に悪影響を及ぼす可能性があります。

■ 借入金依存度 (%) / インタレスト・カバレッジ (回)



□ 株式の状況 2014年6月30日現在

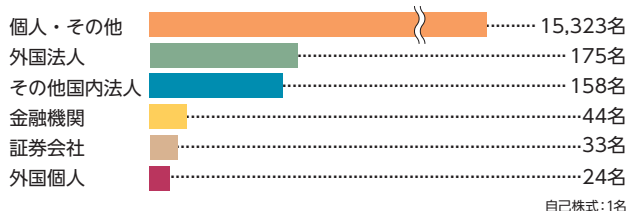
発行可能株式総数	普通株式 100,000,000株
	A種種類株式 1,500株
	B種種類株式 37,500株
発行済株式の総数	普通株式 49,355,938株
	A種種類株式 1,500株
株主数	普通株式 15,758名
	A種種類株式 1名

□ 大株主 (普通株式)

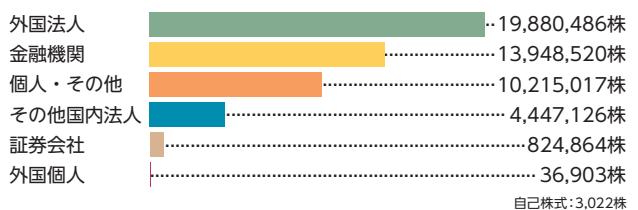
株主名	持株数(千株)	持株比率(%)
TAIYO FUND, L. P.	8,242	16.70
日本生命保険相互会社	3,242	6.57
株式会社みずほ銀行	1,916	3.88
株式会社三井住友銀行	1,864	3.78
TAIYO HANEI FUND, L. P.	1,154	2.34
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社 (信託口)	1,117	2.26
日本マスタートラスト信託銀行株式会社 (信託口)	984	1.99
株式会社三菱東京UFJ銀行	910	1.84
アルバック持株会	904	1.83
稲畑産業株式会社	795	1.61

(注) 持株比率は自己株式(3,022株)を控除して計算しております。

□ 所有者別株主数 (普通株式) 合計: 15,758名



□ 所有者別株式数 (普通株式) 合計: 49,355,938株



ULVAC

株式会社 アルバック

アルバックレポートに関するお問い合わせ先

株式会社 アルバック 経営企画室 広報・IR室

〒253-8543 神奈川県茅ヶ崎市萩園2500番地

TEL.0467-89-2033 FAX.0467-89-2250

www.ulvac.co.jp